ISSN 1348-7965

温泉地域研究

創刊号
2003年 9月

目　　次

日本温泉地域学会誌「温泉地域研究」の創刊に際して …… 山村順次

論 文
日本における湯治場の変容と地域振興 …… 山村順次 (1)

研究ノート
共同湯における「総湯」の歴史的考察 …… 石川理夫 (11)
大正期における別府温泉の別荘地開発 …… 中山昭則 (17)
別府温泉郷における街づくりの動向 …… 浦　達雄 (23)
温泉利用者向け泉質名表記の現状と課題 …… 古田靖志 (29)

基調講演
草津温泉の地域的特性と今後の方向 …… 山村順次 (35)
草津温泉の地域振興策 …… 中澤　敬 (37)

シンポジウム
草津温泉における景観整備の現状と課題 …… (39)

書 評
木暮金太夫編：『錦絵にみる日本の温泉』 …… 山村順次 (48)

温泉地情報
東根温泉のデイサービス事業 …… 吉野妙子 (49)
妙見温泉の活性化 …… 布山裕一 (50)

学会記事 …… (51)

日本温泉地域学会

日本温泉地域学会誌「温泉地域研究」の創刊に際して

日本温泉地域学会会長
山　村　順　次

2003（平成15）年5月11日、日本温泉地の最高位にランクされる草津温泉において、草津町の全面的な協賛を得て日本温泉地域学会設立総会・第1回研究発表大会が開催された。本学会は、温泉と温泉地域をめぐる諸問題が噴出している現在、これまで手薄であった人文・社会科学的温泉地域研究を中心としつつも、すでに多くの学問的蓄積のある日本温泉科学会の自然科学的分野からも、温泉地域社会に関する研究を期待できるような総合的温泉科学会の性格をもっている。

また、本学会は温泉地域の科学的実証研究を推進するとともに、その成果を活かして温泉地域の諸問題の解決に対して前向きに対応し、温泉地域社会の持続可能な発展策を検討するといった大きな意義も有している。

このような基本方針のもとに、大学・研究機関の研究者のみならず、温泉地の旅館経営者、行政機関・温泉団体の職員、温泉評論家や出版関係者、そしてなによりも温泉と温泉地のあり方に強い関心をもっている市民など、160名を超える多くの賛同者が集まり、日本温泉地域学会を支えているのである。

本学会の事業として、①温泉地で年2回の研究発表大会を開催し、それに先立って地域視察会を行い、シンポジウムにつなげること、②その研究成果を発表する場として学会誌「温泉地域研究」を年2回発行することがうたわれている。ここに、予定どおりに「温泉地域研究」創刊号が発行できたことを、会員諸氏とともに心から喜びたい。

本創刊号の論文や研究ノートの内容を見ると、湯治場の変容と地域振興、共同湯の歴史的考察、温泉地開発史上大きな役割を果たした別荘地開発、温泉観光都市の街づくり、最近の出版物の泉質表記の不統一など、多様かつ重要な課題が取り上げられており、参考とするところが多い。研究ノートのうち、3編は第1回研究発表大会で議論されたものであり、オリジナルな資料を駆使しながら意欲的に研究に取り組まれたことを評価したい。本学会では、投稿原稿のレベルアップを図るためにも論文と研究ノートについては査読制度を取り入れているが、会員各位には今後とも、さらに高い評価を受けられるように研究を進め、次号以降に投稿していただきたいと思う。

いずれにしても、本学会は発足したばかりであり、学会誌「温泉地域研究」の充実もシンポジウムの記事や温泉地情報に見るように、会員の積極的な学会活動への参加いかんにかかっている。自由な雰囲気の中にも、会員の地道ながらも学問研究に対する真摯な態度こそが求められており、それが本学会の発展につながるものと確信している。

日本における湯治場の変容と地域振興
Regional Changes and Promotion of Health Spas in Japan

山　村　順　次*
Junji YAMAMURA

キーワード：温泉地（spa）・湯治場（health spa）・地域振興（regional promotion）
ウェルネス（wellness）

1 はじめに

温泉は人々の湯治のために、すなわち温泉に入浴したり飲泉をして、病気を治療するために利用されてきた歴史がある。中世の室町時代、京都五山相国寺の僧瑞渓は『有馬入湯記』において、すでに「湯治一廻り7日、三廻り21日」が必要であることを説いたが[1]、これは今日の温泉医学の温泉療養期間と合致しているのである。江戸時代には、漢方医による温泉療法が普及して、共同浴場（外湯）を中心にして療養客を受け入れる自炊宿が建ち並んだ湯治場が各地に発達し、明治以降には農漁民が厳しい労働の後に温泉地で保養をするようになり、さらに第2次世界大戦後になると、多くの湯治場は1泊宿泊型の観光温泉地へと大きく変容するところとなった[2]。

このように、日本の湯治場は単に温泉療養の場として機能してきたのではなく、農漁民の1年間の生活カレンダーの中に組み込まれて発展してきたのであり、主に東北地方の水田農民や漁民の多くが、毎年「中10日」ほどの保養を楽しむ習慣が一般化していた。田植え後の「泥落とし」、夏ばてを防ぐ「丑の湯」、秋の農産物の収穫後や漁獲後の「骨休め」、風邪を引かないための冬の「寒湯治」などと称しては湯治場を訪れた。

しかし、現在では農漁家の兼業の増大、後継者不足や高齢化の進行、農山村においても全国的に設置された日帰り温泉施設の急増など、農山漁村社会を取り巻く環境の変化は著しく、湯治客の減少を招いて経営の苦境に立たされている湯治場も少なくない[3]。その一方、近年では都市在住の退職した高齢者が湯治場で保養するようになりつつあり、さらには、一般に湯治場は自然環境や温泉資源に優れているので、高速交通網が発達する中で遠隔の都市から若年・中年の女性層や家族連れも保養や観光の目的で来訪することが多くなり、湯治場の機能がこれまでの長期滞在の療養・保養から短期滞在の保養・観光へと大きく変わりつつある[4]。

筆者は高度経済成長期の1960年代後半から1970年代前半にかけて、全国の湯治場の実態を集中的に調査研究し[5]、さらにその後の低成長期から平成時代における温泉地の役割を研究する中で[6]、温泉地本来のあり方としては温泉の保養機能を重視し、人々の心身の癒しの場、予防医学的な健康増進の場としての滞在型保養温泉地を整備することが重要であることを主張してきた[7]。かつて、マスツーリズムのもとに発展した画一的大規模観光温泉地の多くは、平成不況の現在では経営不振に直面しているが、これらの観光温泉地も、今こそ保養機能を前面に出して経営の改善を図る必要がある。

そこで、本稿では全国の優れた湯治場を再認識し、持続可能な保養温泉地として位置付けることを念頭において、筆者の既存の湯治

* 千葉大学教育学部（Chiba University）

場研究を踏まえつつ、機能変化している湯治場の現状を具体的に把握するとともに、その地域振興のあり方を提示したい。

2 湯治場の機能変化

(1) 高度経済成長期の湯治場

1960年代から1970年代前半にかけての高度経済成長期には、熱海・鬼怒川や有馬・白浜などをはじめとする大都市近接の温泉地が、増大する団体慰安観光客に対応するために旅館の設備投資を活発化させ、鉄筋高層温泉ホテルが林立する画一的な観光温泉地・歓楽温泉地を出現させることになった。温泉地所在市町村は目的税の入湯税、県当局は料理飲食等消費税（料飲税）を増やすために、大量観光に支えられた温泉地の観光・歓楽地化を側面から推進してきた。この時期、こうした変化についていけない交通不便な山間の湯治場は、従来からの固定客に支えられた経営を続け、湯治客が格安で滞在できる自炊施設を設けていた。

ここで、旧厚生省（現環境省）の全国温泉地資料によると[8]、1969(昭和44)年の温泉地数は1,609ヶ所、延宿泊客数は1億130万人であった。この資料と温泉地の特性が記載されていた当時の日本交通公社編『全国温泉案内1300湯』[9]をもとに、全国の温泉地を療養型（湯治場）・保養型（観光＞療養）・観光型に3類型化した結果、療養型が温泉地数で25.2%を占めるが、延宿泊客数では6.2%に過ぎず、すでに湯治場の衰退傾向がうかがえた[10]。そして、療養型温泉地のみの全国分布を見ると、延宿泊客数では東北地方が45.8%を占め、ついで甲信越地方が25.3%、北関東と九州地方が各9%強であった。約20年後の1990(平成2)年になると、療養型は温泉地数で14.2%、延宿泊客数ではわずかに3.7%となった[11]。1969年の5万人以上の主な温泉地の類型別分布を示したのが図1である。東北地方の奥羽山脈をはじめ上信越地方の山間部や九州山地に、小規模ながら療養温泉地が集中していることが分か

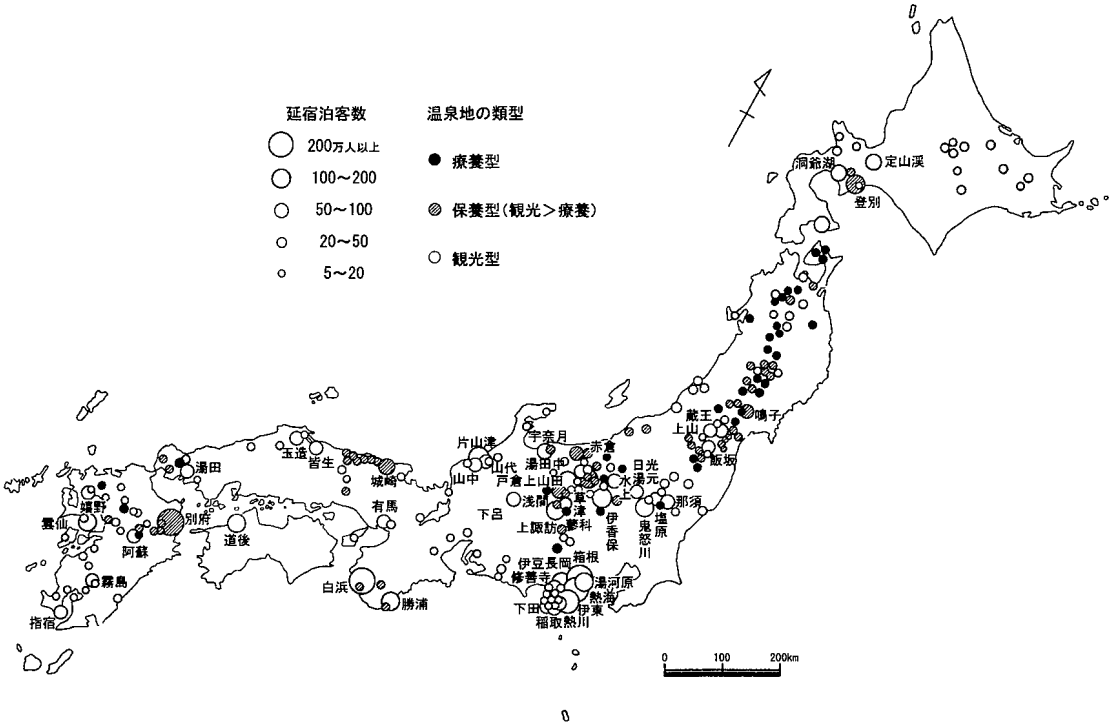


図1　高度経済成長期における主な温泉地の類型別分布（1969年）

（注）旧厚生省「全国温泉統計」と日本交通公社『全国温泉案内1300湯』により作成。

る。

次に、高度経済成長期末の1973（昭和48）年当時の延宿泊客数3万人以上の主な温泉地に対する筆者のアンケート調査に基づいて、歓楽化の程度を示す指標として宿泊客1人当たり料飲税額を算出して地方別に示したのが表1である[12]。

宿泊客1人当たり料飲税額が500円以上で歓楽性が最も強いⅠのタイプは、歓楽温泉地ということができ、伊豆半島（熱海・伊豆長岡など）・北陸温泉郷（片山津・山代・芦原など）・新潟県（月岡など）・近畿（有馬・雄琴など）・北九州（嬉野・原鶴など）の大都市周辺の温泉地がこれに相当する。一方、300円未満のⅣ・Ⅴのタイプは、東北・北海道・九州地方に多く、このうち歓楽性が最も弱い200円未満のⅤタイプは東北・九州地方では療養温泉地であるが、北海道ではいわゆる「観光北海道」の旅行形態を反映して、料飲税額が少ない観光温泉地として特色付けられた。Ⅱのタイプはかなり歓楽化した段階にあり、Ⅲのタイプは保養と歓楽の中間段階にある温泉地といえる。

表1　高度経済成長期における温泉地の歓楽性（1973年）

歓楽性	料飲税額／宿泊客数	北海道	東北	関東	中部	近畿	中四国	九州	計	%
Ⅰ（強大）	≧500円		1		25	5	3	6	40	16.6
Ⅱ（強）	400～500	1	8	8	17	8	10	4	56	23.2
Ⅲ（中）	300～400	3	10	5	2	1	5	12	38	15.8
Ⅳ（弱）	200～300	7	17	6	5	2	2	9	48	19.9
Ⅴ（弱小）	＜200	16	21	4	3		3	12	59	24.5
計		27	57	23	52	16	23	43	241	100.0

（注）筆者の温泉地アンケート調査により作成。年間延宿泊客数3万人以上の温泉地で、回収分の241温泉地のみ。数字は温泉地数を示す。

（2）湯治形態の変化

病気治療のための湯治は3週間の長期療養が基本であるので、湯治客は安い費用で滞在できるように自炊をしながら温泉に浸かり、療養することが多かった。自炊施設を備えた宿泊施設は、基本料金の部屋代のほかに布団代・シーツ代・浴衣代などの別料金を設定しているので、客が選択できる気軽さがあった。かつては布団を担いで来たりする客も多く、必要な備品を宿に預けておく人もいた。宮城県東鳴子温泉の1974年当時の自炊宿の冬季料金は、部屋代600円、布団250円、丹前230円のほかサービス料108円、入湯税20円の計2、308円であり、夜具持込の場合は680円であった。30年後の現在では、3泊以上の滞在で布団・浴衣料込み、税別料金は1泊3,500円、宿がご飯と味噌汁を朝夕に出す半自炊式は4,100円であり、料金の大幅な上昇はない。

自炊宿には共同炊事場があり、そこは温泉浴場とともに湯治客のコミュニケーションの場でもあり、また、宿の外では自炊客のために近在の農家が農産物などを持ち寄る朝市が立ち、地域住民との交流もあった。今日でも、山形県肘折温泉は朝市が立つことで知られるが、多くの湯治場では旅館内に食材や日用品を売るコーナーを設けるようになった。また、生活水準が上がって湯治客も毎日自炊をすることを避けるようになり、料金が少し高くなっても半自炊式や朝夕2食付の旅籠形態に移行する場合が多くなっている。

北東北の青森県酸ヶ湯・秋田県玉川・岩手県須川などの温泉地は、1経営者の下に温泉地が成立しているので、今日でも自炊部と旅籠部（旅館部）が並存して調和を保ちつつ機能している。しかし、東鳴子や大分県湯平などのような温泉集落を形成している温泉地の

例を見ると、個々の旅館の経営方針の違いによって経営形態が変化していることが明らかとなる[13]。すなわち、東鳴子は1973年には16軒の宿泊施設中15軒が自炊を中心とした旅館（うち2軒は自炊専門）があったが、現在でも14軒中11軒が自炊可能（うち3軒は自炊専門）、3軒が旅籠専門であり、地域社会の共通認識のもとに湯治場の性格を色濃く保っている。これに対して、湯平は1969年では54軒の宿泊施設中10軒が自炊専門、39軒が自炊可能、5軒が旅籠専門であったものの、現在では39軒中1軒が自炊専門、3軒が自炊可能、35軒が旅籠専門となり、もはや湯治場の機能は著しく低下したといえる状態となった。

(3) 湯治客の特性

①年齢構成の変化

まず、湯治客の年齢構成の変化を東鳴子・鹿教湯・湯平の各温泉地を例に検討する（表2）[14]。

表2　東鳴子・鹿教湯・湯平温泉における湯治客の年齢構成の変化（1960～2000年）

温泉地	東鳴子			鹿教湯			湯平*
年齢　年次	1961	1967	2000	1960	1971	2000	2000
20代以下	12.7%	4.3%	2.2%	18.8%	9.8%	4.6%	15.9%
30代	13.4	9.7	1.8	14.7	9.1	5.0	18.1
40代	12.9	15.7	3.6	13.4	10.9	7.8	13.1
50代	21.2	25.6	11.0	22.0	15.8	15.2	27.2
60代	24.7	32.4	35.5	22.2	31.3	25.3	22.9
70代以上	15.1	12.3	45.9	8.9	23.1	41.1	2.8
計	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0

（注）各温泉地の1宿泊施設の資料により作成。＊湯平は保養・観光客。

高度経済成長期初期の1960年代初めのころは、東鳴子では近郊の農漁村地域から多くの湯治客を集めており、しかも若年層が多かった。20～30代の働き盛りの人々が4分の1を占めており、60代以上は40%であった。まさに農漁民湯治の典型を見ることができたが[15]、60年代後半にはすでに若年層の減少が著しくなった。長野県鹿教湯でも同様の傾向がうかがえた。1960年代の東鳴子では湯治客の女性率が60%弱であり、農漁業の共同作業をしている夫婦のほか気心の知れた友人が連れだって疲れを癒すために湯治にくる場合が多く、平均11泊していた。鹿教湯では、東鳴子の半分とはいえ平均で5泊しており、1泊型の観光温泉地が多い中で滞在型保養温泉地としての機能を果たしていた。2000年では東鳴子と鹿教湯ともに高齢化が一気に進み、70代以上がそれぞれ45.9%、41.1%を占めるほどになった。平均滞在日数は東鳴子では5泊となって半減しているが、鹿教湯では湯治客に限ると大きな変化はない。

一方、湯平では療養温泉地から保養・観光温泉地へと機能変化が進んだので、かつては高齢者が多かったものの、現在の年齢構成は高齢層が若干多いとはいえ若年層も多く、各年代ともほぼ均等に分布しているのである。

②季節性の変化

秋田県の焼山山麓、標高700mの山間の湯治場である玉川は、冬季の除雪が行われるようになるまでは、おおむね5～10月までの夏半期の季節営業であったが、平地の湯治場である東鳴子は、四季を通じて湯治客が集まり、特に冬の寒湯治にやって来る農漁民で賑わった（図2）。そして、1980（昭和55）年から20年を経た現在、玉川では自炊客は客数と季節性については大きな変化はない。すなわち、自炊客は延4万4,000人で平均7.5泊していたが、現在は4万3,000人で、6.7泊しており、これは別稿で指摘したように

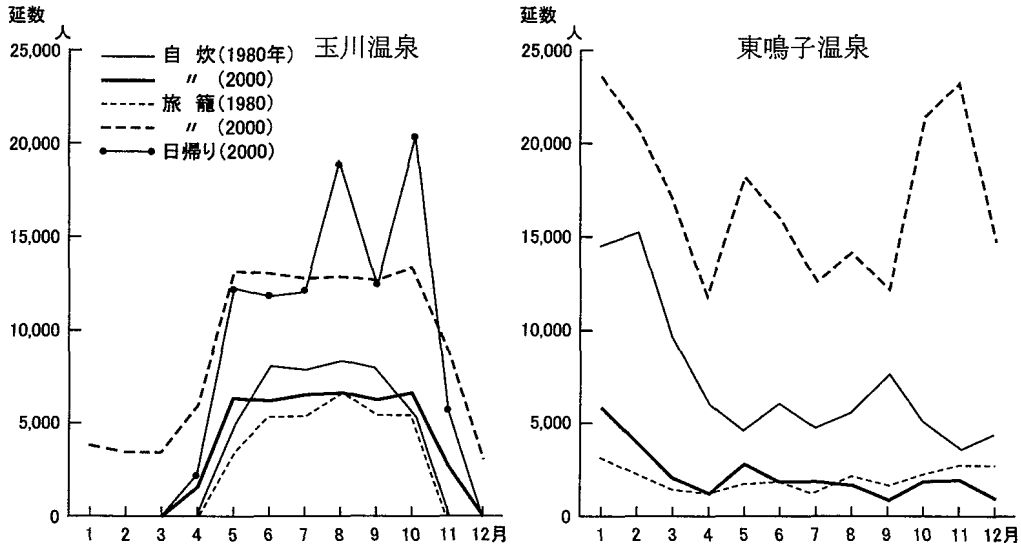


図2　玉川・東鳴子温泉における宿泊形態別季節性の変化（1980～2000年）

（注）玉川温泉と鳴子町の資料により作成。

病気療養の湯治客が今なお多く来訪しているからである[16]。旅籠客については夏季のみならず冬季にも来るようになり、その数を3万3,000人、平均2.5泊から10万7,000人、平均4.5泊へと急増させ、平均滞在数は増えているほどである。旅籠客であっても湯治客が多いことを示しているが、一方では玉川の特異な温泉資源と温泉景観が夏に多数の観光日帰り入浴客を吸引しており、ほぼ20年前の10倍に相当する9万6,000人を受け入れている。

東鳴子では、湯治宿の経営形態が多様化した結果、自炊客は10万3,000人から2万6,000人へと大きく減少するところとなり、逆に旅籠客は2万8,000人から19万9,000人へと著しい増加をしたことが明らかとなった。いずれも1～3月の冬季に客が集中し、季節性の偏りが見られる。旅籠客は鳴子峡の紅葉がすばらしい10～11月の秋にも集中していてピークシーズンをなすが、この時期には多数の観光客が訪れる。

鹿教湯では、長野県厚生農業協同組合連合会（厚生連）の温泉療養所が中心になって1959（昭和34）年に始めた「冬季集団保養」制度のもとに、11～3月までの冬季間に県内農協単位で送客する1週間単位の農民保養が実施されたので[17]、冬季の湯治客が多くなって湯治場の経営安定に貢献したが、現在では農民の高齢化が進んで冬季集団保養客の平均年齢は70代後半となるとともに、客数も大幅に減少している[18]。

③入湯圏の変化

筆者のこれまでの研究から、高度経済成長期の湯治場が局地的な入湯圏を形成していたことはすでに明らかにしたが、その後どのように変化したのかを以下に検討した。東北地方の湯治場の例をまとめたのが表3である。

十和田八幡平国立公園の八甲田山麓、標高925 mの高地に立地する酸ヶ湯温泉は1684（貞享元）年に開湯され、津軽藩有時代を経て明治初年に横内村有志に払い下げられ、数軒の湯治宿が経営されていたが、明治末には組合に統合され、1933（昭和8）年に会社組織となった[19]。この時期に、すでに自炊部に加えて旅籠部が誕生し、十和田湖ルートとの結合も見られた。第2次世界大戦後、除雪が進んで1月下旬まで通行が可能となった1971（昭和46）年では、延宿泊客数は3,300人のスキー客を加えて約8万9,000となり、その74%は自炊湯治客であり、旅籠湯治客

表３　東北地方の酸ヶ湯・玉川・東鳴子温泉における入湯圏の変化（1967 ～ 2001 年）

温泉地	酸ヶ湯				玉川				東鳴子		
年次	1971			2001	1979		2000		1967		2000
住所　形態	自炊	旅籠	観光	全体	自炊	旅籠	自炊	旅籠	自炊	旅籠	自炊
北海道	39%	54%	10%	6%	3%	2%	%	%	1%	1%	%
青森県	54	27	32	30	3	4					
秋田県	4	4	5	2	31	12	8	3	11	8	
岩手県				3	32	20	9	4	11	10	1
宮城県			7	4	9	10	11	13	72	59	81
山形・福島県				2	3	5	11	19	1	4	3
関東地方	3	3	12	18	13	37	17	18	1	4	8
東京都		9	14	13			12	12	3	12	6
その他		2	20	22	6	11	32	31		2	1
計	100	100	100	100	100	100	100	100	100	100	100
延宿泊客数（万）	6.6	0.9	1.1	6.1	4.7	3.2	4.3	10.7	2.2	0.4	0.8
平均滞在数（泊）					8.7	2.3	6.7	4.5	11.5	1.0	5.1

（注）各温泉地の１宿泊施設の資料により作成。

は 10%、観光客は 16%であった。神経痛・リウマチに効能があるという酸性硫化水素泉を求めてやって来る自炊湯治客を中心とした入湯圏は青森県が 47%、北海道が 36%で、両者で 83%を占めるほどであり、2 万人を数える部屋利用の日帰り客については青森県が 61%であった。それが、2001（平成 13）年では自炊湯治客は 18%へとウエイトを減じつつ変化し、旅籠湯治客は 27%へと構成比を増すとともに檜千人風呂に入浴した観光宿泊客は 43%を占めるほどに急増していて、酸ヶ湯は都会人の秘湯としての性格が強まっている。したがって、入湯圏は全体としては青森県が 30%を占めるものの、関東地方・東京都へと広域化し、31%を示すほどである。また、酸ヶ湯はブナの原生林に覆われた観光ルートの拠点ともなっていて、日帰り入浴客数は 12 万 6,000 人にものぼる。

同様に、玉川温泉も 1979 年には秋田・岩手県の湯治客が 63%を占めており、局地的な入湯圏が形成されていたが、2000 年では両県の比率は 18%に過ぎず、これは農民湯治客の減少を物語っている。玉川の豊富な強酸性硫化水素泉含有硫酸塩泉の効能が喧伝され、入湯圏が全国的に拡大して中部地方以西の湯治市場が 30%を示すほどである。事実、自炊湯治客数は延数 4 万人台、平均滞在数は 7 ～ 9 泊で大きな変化はないが、旅籠客は一部に観光客を含むとはいえ関東地方・東京都や中部地方を中心に約 20 年間に 3.3 倍の増加を示し、今なお平均滞在数が 4.5 泊にもなる温泉療養目的の湯治客であふれている。

これに対して、東鳴子温泉の自炊旅館の例を見ると、自炊湯治客は大幅に減少してはいるが、その入湯圏は現在でも仙台平野の農村地域や三陸沿岸の漁村地域を中心とした宮城県内が 70 ～ 80%を占めるほどのローカル性で特色付けられる。しかし、保養客や観光客は関東・東京方面へと少しずつ入湯圏の広がりを見せつつある。

次に、鹿教湯温泉と大分県鉄輪温泉の入湯圏の変化をまとめたのが、表 4 である。

長野県の東部、小県郡丸子町にある鹿教湯は近世期以来高血圧症に効能がある温泉地として知られる。戦後、内村川の河床から湧出する弱アルカリ性単純温泉の大湯源泉が脳卒中のリハビリ・予防に効果があるとの研究結果が出された[20]。これを踏まえて、地元

表４　鹿教湯・鉄輪温泉における入湯圏の変化（1971 ～ 2002 年）

温泉地	鹿教湯（旅籠）		温泉地	鉄輪（自炊）	
住所　年次	1971	2000	住所　年次	1972	2002
長野県	22%	29%	大分県	8%	6%
北関東地方	7	7	福岡県	47	38
南関東地方	21	26	九州地方	7	12
東京都	40	17	中国地方	23	17
中部地方	8	12	四国地方	14	7
その他	2	9	その他	1	20
計	100	100	計	100	100
延宿泊客数（万）	2.3	1.8	延宿泊客数（万）	0.7	0.5
平均滞在数（泊）	3.9	4.8	平均滞在数（泊）	7.4	3.2

（注）鹿教湯は国民宿舎、鉄輪は１自炊旅館の資料により作成。

民の積極的な誘致運動のもとに、1956（昭和 31）年に長野県厚生連が温泉療養所を設置し、現代医学に基づく本格的な湯治場を成立させた。前記したように、この療養所は３年後の 1959（昭和 34）年に「冬季集団保養」事業を始めたので、冬季間は長野県内の農民が多く滞在することになった。その数は 1974（昭和 49）年には実数で１万人、延宿泊客数は７万人に及んだ。その当時の国民宿舎の宿泊客を見ると、東京都 40%、南関東 21%のように首都圏からの客が多く、夏季を中心にして約４泊ほどの滞在をしていたのである。30 年後の今日では、国民宿舎の入湯圏の地域的特性は東京都のウエイトが減っているものの大きな変化はないが、保養と観光を両立させている旅館では、２月の集団保養時期には長野県のシェアが 77%に達する反面、10 月の観光シーズには１～２泊程度の宿泊をする保養客の入湯圏は、長野県 21%、東京都を含めた南関東が 62%に達する[21]。

別府温泉郷を特色付ける湯煙の里・鉄輪温泉は、1970 年代には自炊専門の入湯貸間が 50 軒もあり、１週間～ 10 日もの長期滞在をする湯治客が多かった。湯治客の多くは地熱を利用した地獄釜で自炊をしながら療養をする。自炊専門旅館の宿帳をまとめると、大分県内客が極端に少なく、温泉資源に恵まれない福岡県や中四国地方からの湯治客が冬季を中心に滞在するのであり、特に瀬戸内海航路の便利さもあって、他の湯治場とは性格を異にして入湯圏の広域化が進んでいる。その傾向は基本的には現在でも変わることはないが、近年ではさらに大阪など近畿圏へと広がりを見せつつある。

３　湯治場の類型と地域振興策

（1）湯治場の類型

平成時代に入ってからの過去 10 数年間に、日本の温泉地を取り巻く環境は大きく変わった。飛行機・新幹線・高速自動車道など高速交通網が全国的に整備され、飛行機による格安ツアーの催行は、遠隔地の温泉地へ気軽に行ける機会を増やし、また自家用車での遠出が可能となって家族連れや友人連れで温泉浴を楽しむようになってきた。ここに、個人レベルでの温泉志向性が多様化してきたのであり、外湯や露天風呂のある個性的な温泉地や交通が便利で料金の安い日帰り温泉施設などが多くの客を集める傾向が出てきた。特に、1988（昭和 63）年の「ふるさと創生１億円事業」は 10%を超える市町村がこの資金を温泉関係に使用したといい、地下 1,000 m を超える大深度掘削ができるようになって、第３セクター方式による地方自治体が関与した日帰り温泉施設が全国的に乱立することに

なった[22]。

こうした中で、施設が古くかつ年配者の集まる温泉地としてのイメージが強かった湯治場は、固定化した客が近くの新しい日帰り温泉施設を利用するようになったりして、経営不振を招くところも出始めた。湯治宿経営者の方針転換のもとに、自炊施設を閉鎖して旅籠湯治へと移行した場合であっても、滞在数は1週間以上の長期滞在から数泊程度に短縮せざるを得ない状況となった。その一方で、地域性豊かな湯治場や保養温泉地は、近年のマスコミでの報道によって特に都市部の若年・中年の女性層や家族連れに高く評価されるようになり、宿泊・日帰りともに客の増加が顕著となっているのである。

ここに、湯治場とはいえその機能が変質して異なる性格を有する場合が多々見られるようになってきた。湯治場の温泉療養性・保養性・秘湯性・観光性などを視点として類型化を試みると、次の3類型に分類できよう。

①療養型湯治場

これはまさに、温泉医学の成果を基礎として、温泉療養効果を期待できる湯治場である。その数は少ないが、玉川温泉はその最右翼に位置する温泉地である。1997（平成9）年10月における玉川温泉宿泊客への筆者のアンケート調査の結果[23]、自炊部・旅館部（旅籠部）ともに50代以上の中高年層が80%以上を占め、退職者や主婦層を中心に会社員・自由業など多様な職業の人々が来訪し、6泊以上が自炊部で82%、旅館部で32%に達するほどに長期滞在をしている。来訪目的は療養が自炊部で61%、旅館部で43%であり、自炊部では10回以上のリピーターが30%を占めた。湯治客の病状は高血圧症・消化器病・循環器病など内科疾患が37%を示し、神経痛・リウマチ・腰痛が25%であり、皮膚病・ストレスなども多かった。湯治効果については、「大変あり」「少しあり」「わからない」が各3分の1であり、温泉療法医の指導も行われていることは、玉川温泉の特性をよくあらわしている。

この類型の湯治場は、近年の温泉医学界の指導力の低下のもとで、ごく一部の温泉地に限られる。しかし、鳴子温泉郷の東鳴子・川渡・中山平などの旅館有志が町立温泉病院の指導を得て温泉療養プランを立て、何らかの病状のある湯治客を支援していこうとしている動きは、新たな療養型湯治場を形成する先例をなすことにもなろう[24]。

②保養型湯治場

現在、多くの湯治場はこの類型に相当する。かつて長期滞在の療養温泉地として確立していた湯治場が、短期の保養温泉地に変化したところである。鹿教湯のような温泉病院の指導のもとに高血圧症の後遺症のリハビリ温泉療法が行われてきた湯治場でも、冬季集団保養が健康保持のためには大きな意義を有するとはいえ、温泉療養を前面にうち出した取り組みをしているとはいい難い。旅館経営面から見ても、長期滞在を可能にする自炊方式は消滅しており、設備投資の結果、消費単価の高い短期保養客の誘致に力が注がれている。

岩手県花巻市の鉛温泉は1軒宿であるが、自炊部と旅館部を併設し、年間延1万人を超す自炊湯治客が毎年来訪しており、平均滞在数は10日である。県内の農村部や三陸海岸の漁村地域からの農漁民が80%を占めるほどのローカルな入湯圏を有し、その目的は病気治療というよりは骨休めであり、おおむね60代以上の高齢の男女が保養のために夫婦や友人連れで来ては温泉浴を楽しみ、お互いの触れ合いを深めている[25]。

本稿で取り上げた湯平や鉄輪も、現段階ではこの類型に相当するが、次第に観光色を強めつつあることが指摘される。

③秘湯型湯治場

この類型の湯治場は、秘湯や山間部の露天風呂が観光資源化して、特に都市住民に脚光を浴びることになって、急成長している温泉地である。したがって、これまでの保養機能に加えて観光機能が強まりつつあるが、とは

いえここでの観光は、まさに自然環境と一体化した温泉そのものを楽しみ、温泉情緒を味わう温泉観光本来の姿を示している。長野県白骨や青森県酸ヶ湯、秋田県田沢湖町の山間部の鶴の湯や黒湯をはじめとした乳頭温泉郷の湯治場などが、このタイプの典型例である。筆者が最近発表した新世紀日本温泉番付においても、白骨は全国4位、東の大関にランクされ、乳頭温泉郷は全国12位、、東の小結に位置するほどである[26]。

(2) 湯治場の地域振興策

湯治場の地域振興策は、当然のことながら各湯治場の地域性を活かしつつ検討されねばならないが、ここではこれまでの研究を踏まえて、まず今後の保養温泉地域形成に際して重要な一般的振興策をまとめることにする。

①温泉資源の良さを最大限に発揮できるようにすることである。温泉の温度・湧出量・泉質の3要素を活かし、個々の旅館の浴槽や露天風呂などに工夫を凝らすだけではなく、地域を挙げて湯治場のシンボルとなるような外湯（共同浴場）を設ける必要がある。

②温泉の入浴法や飲泉利用などについて、温泉療法医を配して温泉療養・温泉保養・健康保持などの相談に応じる体制を確立しなければならない。特に、環境省の国民保養温泉地に指定されている温泉地は、温泉保養客が安心して滞在生活を送れるように、地域社会を挙げて配慮すべきである。

③温泉保養にとっては、温泉入浴だけではなく、温泉地域の気候・地形・植生などの自然環境、運動療法・食事療法の有無など複合的な諸条件によってその効果が左右されるので、地域環境の保全と保養客の滞在メニューを検討することが求められる。

④湯治場内や周辺地域の散策コースを設定して、毎日ガイドが地域案内をすることが重要である。地域の自然・歴史・産業・生活・文化などの諸相をきめ細かに説明することは、保養客にとっては運動にもなり、地域理解につながるとともに、地域の人々との触れ合いの機会を増すことにもなる。

⑤地域の伝統行事を紹介したりして、滞在保養客と地域住民との交流を積極的に行うとよい。外湯の前の広場で毎日朝市を行えば、周辺農村地域との交流も広がることになる。

4　むすび

以上述べてきたように、これまでの湯治場は時代の社会経済の変化に対応しつつ形を変え、その機能・性格を多様なものにしてきた。全国的にその現状を見ると、特に東北・上信越・中九州などに地域的偏在はあるが、個性的な湯治場が比較的多く残されており、近年の国民の温泉志向性にマッチした環境を保持しているのである。

国民が温泉地に望むものは、10数年前と変わらず「温泉資源」「自然環境」「温泉情緒」の良さの3点に集約され[27]、温泉入浴のみならず温泉地を訪れて滞在する間に諸々の体験をする中で、ストレス解消などを含めた心身の癒しを期待しているのである。それゆえ、国民の健康づくりを志向したウェルネスの考えと保養温泉地の環境保全・持続可能な経済発展を一体化した地域振興策が必要となる。湯治場はまさにこうした諸条件を備えており、今後とも旅館経営者を中心に地域社会を挙げて地域環境の保全に取り組み、温泉保養客を暖かく迎えるシステム作りとホスピタリティをもって接すれば、地域振興の成果が大いに期待できる。

天与の温泉資源を大切に保護し、その有効な利用を図って温泉保養客に心身の癒しの場を提供するところが湯治場であるならば、温泉資源性・環境保全・経営面から見た湯治場の適正規模を踏まえた地域振興策が、旅館業者・地域住民・地域行政体や保養客を交えて検討され、その実現を図るためにそれぞれが最大限の尽力をすることが肝要である。

注・参考文献

1）小澤清躬（1938）:『有馬温泉史話』五典書院、360 頁。

2）山村順次（1988）:『新版・日本の温泉地－その発達・現状とあり方』日本温泉協会、239 頁。

3）佐川日奈子（1988）:「湯治場集落の発達と湯治慣行の変容－秋田県乳頭温泉郷を事例として－」秋大地理、第 35 号、19 ～ 24 頁。

4）小堀貴亮（2003）:「大分県湯平温泉における湯治客の実態」日本温泉地域学会第 1 回研究発表大会発表要旨集、13 ～ 14 頁。

木村妙子（2003）:「秋田県乳頭温泉郷を中心とする観光客の流動」秋大地理、第 50 号、17 ～ 20 頁。

5）山村順次（1972）:「湯治場は生き残れるか－北東北における実態と課題」観光、第 8 巻 4 号、25 ～ 36 頁。

同（1973 a）:「大分県湯平療養温泉集落の形成とその意義」経済論集、第 19 号、87 ～ 120 頁。

同（1973b）:「八幡平の湯治場と入湯客」温泉、第 41 巻 6 号、44 ～ 47 頁。

同（1974）:「国民保養温泉地としての群馬県四万温泉」温泉、第 42 巻 1 号、44 ～ 46 頁。

同（1975）:「別府市鉄輪療養温泉の実態」温泉、第 42 巻 9 号、28 ～ 30 頁。

同（1976）:「長野県鹿教湯療養温泉集落の形成と構造」地理学評論、第 49 巻 11 号、699 ～ 713 頁。

同（1977）:「鳴子温泉郷における湯治客の地域的特性」千葉大学教育学部研究紀要、第 26 巻第 1 部、245 ～ 256 頁。

同（1979）:「東北山村における療養温泉地と観光温泉地の存在形態－岩手県湯田町湯川・湯本の場合」日本観光学会研究報告、第 10 号、55 ～ 66 頁。

6）山村順次（1998）:「岩手県湯田町における温泉地の地域振興とその課題」千葉大学地理学研究報告、第 9 号、1 ～ 12 頁。

山村順次・小堀貴亮（2000）:「東京周辺における日帰り温泉地の地域的展開」観光研究、第 12 巻 1 号、1 ～ 8 頁。

山村順次（2002 a）:「江戸・明治時代と平成における日本温泉地番付」温泉、第 70 巻 2 号、4 ～ 7 頁。

同（2002 b）:「長野県鹿教湯療養保養温泉地の変容」千葉大学地理学研究報告、第 13 号、1 ～ 10 頁。

同（2002c）:「湯治場の現代的意義と課題」総合観光研究、第 1 号、21 ～ 31 頁。

7）山村順次（2001）:「現代湯治場論」民間活力開発機構編『改訂版温泉療養の手帖』同機構、289 ～ 292 頁。

8）平岡千明（1971・1972・1973）:「昭和 44 年度全国温泉利用状況一覧（その 1 ～ 4）」温泉工学会誌、第 8 巻 1 号～ 3 号、38 ～ 56 頁、95 ～ 112 頁、174 ～ 188 頁、第 9 巻 1 号、37 ～ 58 頁。

9）日本交通公社（1969）:『全国温泉案内 1300 湯』日本交通公社、322 頁。

10）浅香幸雄・山村順次（1974）:『観光地理学』大明堂、234 頁。

11）山村順次（1995）:『新観光地理学』大明堂、270 頁。

12）山村順次（1974）:『日本温泉地の地域的展開と開発』日本地域開発センター、72 頁。

13）前掲 5）（1973a）・（1977）

14）前掲 12）

15）前掲 5）（1979）岩手県湯田町湯川温泉でも、1967（昭和 42）年の自炊湯治客の年齢は、20 代 11.7 %、30 代 17.8 %、40 代 12.0 % で計 41.5%を占めたが、職業構成では農業が 71.6%で圧倒的に多かった。

16）前掲 6）（2002 c）

17）前掲 5）（1976）

18）前掲 6）（2002 b）

19）山村順次（1974）:「日本の温泉地の地域的展開（13）－青森県酸ヶ湯温泉と岩手県須川温泉の場合－」温泉、第 42 巻 8 号、39 ～ 41 頁。

20）大島良雄（1956）:「温泉の医学」鹿教湯温泉療養所、17 ～ 22 頁。

21）前掲 6）（2002 b）

22）前掲 6）（2000）

23）前掲 6）（2002 c）

24）菊地荘悦（2003）:「鳴子温泉郷の『温泉療養プラン』」日本温泉地域学会第 1 回研究発表大会発表要旨集、15 ～ 16 頁。

25）1 旅館の資料によると、60 代 35 %、70 代 27%、80 代以上 8%であり、60 代以上は 70%に達している。

26）前掲 6）（2002 a）

27）山村順次（1998）:「温泉観光客の志向性と温泉地のあり方」まちづくりガイド、119 号、11 ～ 13 頁。

共同湯における「総湯」の歴史的考察
Consideration of Historic Community Bath "SOYU"

石　川　理　夫*
Michio ISHIKAWA

キーワード：共同湯 (community bath)・総湯 (SOYU)・惣村 (historic village community)
惣有 (common ownership)

1　はじめに

今日、温泉と温泉地をとりまく状況と温泉利用者、国民が向けるまなざしには、さまざまな面において厳しいものがある。しかし、そうした状況の顕在化の時代こそ、温泉と温泉地の＜原点＞に立ち返った問題点の整理と展望が求められている。そのためには、温泉と温泉地の歴史的成り立ちへの洞察、とらえ返しが不可欠であるが、そのとき重要かつ示唆的なかぎとなり得るのが、伝統的な共同湯の存在である。なかでも、「総湯」と呼ばれる共同湯の成立過程には興味深いものがある。本稿は、その考察の一端を示すものである。

2　共同湯の性格と名称・分布について

(1) 入浴施設における＜公共＞性と＜共同＞性の差異

竹下内閣時代の「ふるさと創生資金」にも支えられ、全国の市町村自治体がこぞって建設した公共日帰り温泉施設が近年数多く見られる。こうした公共温泉（施設）といわゆる共同湯とは、建物の外観と反比例するように、そこで提供される温泉の質を含めて、歴然とした差が見られるが、だれでも入れる＜公共＞的な入浴施設としての利用形態では共通している。しかし、両者の性格は本質的に異なる。

今日まで維持されてきた伝統的な共同湯は、泉源（湯坪）の帰属（所有権と所有形態）とは後に乖離が生じるとしても、温泉を利用する慣習権的な権利と共に浴舎までを、温泉が湧き出た土地に生活する人々を構成母体とする「温泉財産区」「温泉組合」などが＜共同＞で所有し、日々の清掃を含めて維持管理してきたものである。これが最も典型的に保たれているのが、長野県野沢温泉村の野沢温泉であることはよく知られていよう。野沢温泉の現在13カ所ある共同湯の大半は、各共同湯を囲む「湯仲間」という地区住民の集まりによって日常的に維持管理され、それを地域共同体自治組織「野沢組」（惣代。財産管理は「財団法人野沢会」）が包括的に管理運営するかたちをとっている[1)]。なお、泉源については野沢組の構成員である所有者たちが「源泉所有者組合」をつくり、野沢組に管理運営を委ねている。

すなわち、伝統的な共同湯を支えてきたのは、温泉を育む地域共同体そのものといってよい。この場合、共同湯の＜公共＞的性格は、衆知のように温泉の慣習的権利に対しても入会権問題同様、近代的私的所有制が貫かれていく以前からの、温泉地の地域共同体による共同・共有的性格によって実体的に裏付けられている。

これに対して、いわゆる公共温泉施設は、自治体など公的機関が主体となって税金で建

* 温泉評論家 (Spa critic)

設して運営し、当該自治体の範囲を超えて広く一般に利用機会が開かれているから、<公共>の名で呼ばれるにすぎない。たまたま温泉掘削地か施設建設地に該当したために温泉地となった地域の住民や共同体も、行政サービス対象の一つでしかなく、地域共同体にしっかり根ざしているわけではない。そこには温泉地域との歴史的結びつき、<共同>性は最初から欠如したままである。

こうした共同性の欠如は、当該入浴施設の日常的な温泉管理のあり方にも影響するはずである。すなわち、共同湯であれば、財産区の構成員にかぎらず地元入浴者は共同湯の源泉の湯量も維持状況もわきまえているから、湯船の規模を拡大することも、源泉の無駄遣いもしない。したがって、共同湯は大半「源泉掛け流し」が保たれている。さらに、レジオネラ症で問題となっている浴槽の衛生管理についても、地区当番や専属の管理人によって毎晩湯を抜かれ、複雑な循環湯システムではない湯船の底まできれいに清掃され、再び新しい源泉が注ぎ入れられる。源泉掛け流しと毎日の清掃による安全な衛生管理、今日の温泉愛好者が求めるこの二点がクリアされている共同湯は、社会的にも見直されるであろう。

(2) 共同湯の地域分布傾向

伝統的な共同湯が今日全国にどのくらい存続しているか、残念ながら現時点では確かな統計的資料を持ち得ていない。そこで、共同湯としての実態掌握の不確実さを含み、あくまで目安としての数字であるが、筆者がこの20年間のうちで実際に訪ねた温泉地のうち、データ保存している1,422ヶ所の温泉地に関して、約520ヶ所の共同湯を数えることができた（表1）。今後検証を重ねて、より精度を高めていきたいが、この中から、共同湯がどういった地域に集中しているかという分布傾向をうかがうことは可能であろう。

表1　伝統的共同湯の地域分布（1983～2003年）

地域	共同湯数	地域	共同湯数	地域	共同湯数
北海道	26	山梨	2	山陽	11
青森	20	長野	60	山陰	11
秋田・岩手	10	新潟	15	四国	1
山形・宮城	28	静岡	30	北九州	7
福島	27	岐阜・愛知	3	熊本	19
栃木	15	北陸	7	大分	165 *1)
群馬	31	近畿	17	南九州	14 *2)
関東	5			計	524 *3)

（注）筆者調査による。*1) 別府温泉郷の共同湯150ヶ所を含む。
*2) 鹿児島県はこの数字以上に共同湯の実態があると考えられる。
*3) 温泉銭湯は除くが、相当以前から地域社会に根づいていて、地区単位の共同湯との区別が判然としなかった市営・町営共同浴場の一部は含まれている。

日本有数の温泉エリアである東北地方は、全般に共同湯が多いと考えられがちであるが、山間部を中心とした一軒宿の湯治場が多い秋田・岩手県に代表される一軒宿温泉地型と、青森・山形・福島県のような集落温泉地が多い集落温泉地型に二分され、数字にもその傾向が反映されている。共同湯を育てやすい集落温泉地は、全国的には静岡県伊豆半島の温泉、共同湯が17ヶ所ある草津、4ヶ所の四万・湯宿各温泉のある群馬県・栃木県・長野県・石川県、鳥取県に多く見られる。全国一の圧倒的な共同湯数を誇る別府は言うまでもない。さらに集落温泉地には、熊本県と大分県にまたがる温泉が豊富な阿蘇・久住地方のように、宿がなく共同湯のみの温泉地も

今なお多く含まれている。

(3) 共同湯名称の類型

次に、こうした共同湯の名称であるが、いくつかの傾向が見られる。その中には、本題である「総湯」のように、共同湯の成り立ちにかかわる名称が含まれている。現在各地にある共同湯の主な名称を由来や特徴で大まかに類型的に分けたのが表２である。

こうした名称の詳細な考察は省くが、なかでも注目したいのが、「大湯」型と地域的集中が顕著な「総湯」型である。「大湯」は、共同湯 13 ヶ所を数える野沢温泉や９ヶ所の湯田中渋温泉に象徴されるように、比較的大きな温泉地に複数の共同湯が存在する場合、最大かつ温泉集落の中心的な共同湯に冠されることが多い。

表２　共同湯名称の類型（2003 年）

主な類型	名称	代表的な共同湯の例
大湯型	大湯・下大湯	下風呂（青森）・夏油 *1)（岩手）・小安峡（秋田） 青根（宮城）・上山（山形） 野沢（長野）・角間（〃）・湯田中渋（〃）・別所（〃） 山田（〃）・鹿教湯（〃） 熱海（静岡）
総湯型	総湯	山中（石川）・山代（〃）・粟津（〃）・湯涌（〃） 和倉（〃）・白峰（〃）・片山津（〃） 野沢（長野）
泉源位置表示型	上ノ湯・下ノ湯 河原湯	大湯（秋田）・蔵王（山形）・湯ノ花（福島）
動物由来型	むじなの湯・鹿の湯･鷹の湯	浅虫（青森）・塩原新湯（栃木）・那須湯本（〃）松之山（新潟）・奴留湯（熊本）
霊験感謝型	薬師の湯・大師の湯・まんだらの湯	湯西川（栃木）・川治（〃）・別所（長野）・城崎（兵庫） 湯村（〃）・長門湯本「恩湯」（山口）
地区名表示型	共同湯地区	多数例
効能性状表示型	疝気湯・有乳湯 綿の湯	肘折（山形）・田沢（長野）・中塩原（栃木）・湯の峰「つぼ湯」（和歌山）
無表示型	○○温泉共同湯	温湯（青森）・秋保（宮城）

（注）筆者調査による。*1) 現在、管理は老舗湯宿が行っている。

そして、野沢温泉のシンボル「大湯」は、内部の掲示に「昔『犬養御湯』と称す。総湯、一名大湯…」と記されているとおり、以前は「総湯」と呼ばれていた。ここからも「大湯」と「総湯」には温泉地と共同湯の成り立ちにかかわる一定のつながりが想像される。

３　「総湯」を生み出した歴史的背景

(1) 石川県に集中する「総湯」

「大湯」の分布圏は長野県を中心に、東北地方の一部にかかっている。しかし、東北地方の温泉集落は未発達で規模が小さく、また、ほかの小さな共同湯を従えているわけではない。これに対して、信濃国・長野県では、湯田中渋温泉郷や野沢温泉・別所温泉など江戸期以前からの集落共同体の十分な発達を背景に、複数の共同湯を集落内に擁している。その中で、ほかの共同湯と区別して、「大湯」という名称が生み出される過程があったのであろう。

一方、「総湯」はかつての加賀国・石川県にのみ、現在では際だつかたちで名称が残

されている。県南部の加賀温泉郷の粟津・山代・山中各温泉はもちろん、和倉・湯涌の両温泉とも、該当する温泉地はいずれも大きな集落共同体で、「大湯」のある温泉集落同様、温泉自体の歴史も古く、室町戦国時代にはすでに共同体の輪郭を十分に形成している所が占めている。

山中温泉の場合は、医王寺所蔵の絵巻『加賀山中温泉縁起』が知られているが、1473（文明５）年旧暦９月下旬に浄土真宗の蓮如上人が「加州山中湯治」に訪れたと『御文』に記されていることが、文献上温泉の所在が確かめられる最初の記録である。

越前吉崎に道場を構えて、山中温泉入湯も果たした蓮如上人は、加賀の地での浄土真宗（一向宗）布教に大きく寄与した。それは、蓮如上人自身が「百姓の持（ち）たる国」と驚嘆のまなざしで語ったような、各集落共同体の自治的結束に支えられた農民・地下侍・門徒衆ら一向一揆勢力が支配する国を歴史に誕生させた。

そして、およそ１世紀後の1580（天正８）年、信長の命で一向一揆勢力を鎮圧し、山中温泉のある地区でも拠点となった黒谷（山中）城を押さえた柴田勝家は、山中温泉では乱暴狼藉は許されないという禁制を出し、温泉地保護に乗り出している。このように、山中温泉が少なくとも室町時代には確実に湯治場として開かれており、戦国期には戦国大名が禁制を出すほど、温泉場への人々の集中があったことがうかがえる[2]。

山代温泉も同じ時期、1565（永禄８）年に明智光秀が入湯したという記録を持つ。加賀前田藩の支藩である大聖寺藩の支配下に置かれた山代温泉では、湯を管理する「山代旅屋番」が置かれたが、この旅屋番が湯宿全体に及ぶ「湯本の惣支配」を行なったという記録が残る。この場合の「惣」とは、単に総まとめ的な意味での「総」の字の言い替えではない。江戸期に入っても「惣百姓」というかたちで続いた、歴史的背景を持つ用語としてあることに留意したい。

そして、藩政期の山代温泉の共同湯の浴室の詳細な様子まで記した、1781（天明元）年６月の『今江組巨細掌記』では、共同湯のことを明確に「一ヶ所惣湯」と記している[3]。なお、「惣湯」と記された山代温泉の共同湯について、幕末期の1854（嘉永７）年の武田友海著『山代志』では、「外（そう）湯」と記して「惣湯」にあてていることもある[4]。これは山代温泉の場合、山中温泉と違って早くから共同湯「惣湯」をとりまく宿にも湯を引いて、「内（うち）湯」を設け始めており、それで惣湯を「外湯」とも呼ぶようになったからと考えられる。しかしまた、『山代志』はほかの所では、「外にたたえたるいで湯（惣湯）に里人おほくあつまりたり」[5]と記しているから、あくまで共同湯とは、山代温泉の集落共同体にとって一つしかない「惣湯」だという基本認識の上での言い替えなのであろう。

一方、山中温泉では、現存古図でいちばん古いのは、1715（正徳５）年刊行の『六用集』所収（金沢市立図書館蔵）の「山中湯図」とみなされている[6]。そこには、今日の総湯「菊の湯」が建つ広場に、男女別に仕切られた共同湯の浴場があり、「瘡湯」と記されている。これで「そうゆ」と読ませているが、山中温泉は本来石膏泉という、鎮静効果があって傷や「かさぶた」にも効く泉質であることから、この字をあてたのであろうか。それでも、『山中町史』には「明和、文政二回の改築の際に調整せる古図に拠れば、惣湯と称する共同浴場の西側に…」と記している[7]。

ところで「惣湯」という表現は、決して山代や山中に限ったことではない。江戸時代の『旅行用心集』には、会津若松に近い現在の東山温泉（天寧寺温泉）を、「湯元は一つで」「町の中には惣湯が一軒あり…」と共同湯について紹介している。江戸時代には一般に広く認められた用語であったことがうかがえる。

その点、加賀国から唯一離れていたが、鎌倉時代にはすでに温泉の存在が記述されてい

た北信濃の野沢温泉の場合、戦国時代には上杉謙信と武田信玄が勢力圏としてしのぎをけずりあう中で湯治場として認知されていた[8]

その野沢温泉でも、「大湯」の前身である「総湯」とは本来「惣湯」と記されるべき歴史的性格がより浮彫りになってくる。たとえば、飯山城主が野沢温泉に湯治用別荘を建てる際の沙汰を記した1706（宝永３）年の文書にも「惣湯」からの源泉を御用湯に充てることが明記されている。当時から複数あった共同湯の中でも人が最も集まる「惣湯」の中心的位置は明白であった。今日まで野沢温泉のすべての共同湯（と大半の源泉）を管理運営する野沢組の代表責任者が、「野沢組惣代」であり続ける地域共同体自治組織の歴史的意味は大きいものがある。

ここで立ち返れば、かっての加賀国、今日の石川県にのみ残されている「総湯」は、まさしく「惣湯」である。その歴史的名称にいかに重きを置いているかは、表２の白峰温泉と片山津温泉の２つとも、惣湯を育んだ歴史的時代よりずっと後（明治ならびに戦後）にできた共同湯であるにもかかわらず、「総湯」の名を誇しく冠していることからも推察できよう。

とくに山中温泉は、いくつかの源泉を持っていた山代温泉と異なり、泉源（湯坪）が１ヶ所であったため、源泉が湧き出てくる湯坪に簡単な湯船をこしらえ、共同利用することから山中温泉の温泉地としての歴史、共同湯は始まったのである。湯船はやがて屋根がけされていつでも入れるようになり、人々が集まるにつれて、周囲に宿や店、休憩所ができ、惣湯のある広場を中心に温泉集落が展開していく。この経過は先の『加賀山中温泉縁起』絵巻によく描かれている。そのため、山中温泉では、惣湯としての共同湯の代表的かつ唯一無二の本質が如実に表れている。

(2)「惣(総)湯」を育んだ「惣村」の発達地域

では、なぜ「惣(総)湯」は加賀国・石川県の歴史のある集落温泉地に固有かのように出現したのだろうか。それが共同湯の歴史的性格にかかわるものであれば、同じ条件を満たしたほかの地域の温泉地にも見られてよいはずである。結論的に言えば、温泉集落の中核的な共同湯の名称を「惣湯」と冠するだけの「惣村」の形成が他地域では不十分だったからではないだろうか。

本研究ノートでは要約的に指摘するにとどめるが、日本の中世史に出現する「惣」的な村落共同体が最も典型的に見られるのは、都に近い近江国（滋賀県）など近畿一円から北陸（若狭・加賀）にかけての地域である。この地域は、一向宗の影響力の強い地域と重なっている。一向宗門徒組織を支えた道場は惣村的結合に深く根づいていた[9]。

そうした地域を温泉地の観点から照射すると、承知のとおり近江・近畿圏から若狭・越前の諸国にかけては、豊富な温泉に支えられた温泉集落は見られない。唯一加賀国に至って、加賀温泉郷や湯涌・和倉温泉の地で共同湯を生み出すだけの十分な惣村的共同体の構成員数と社会基盤、湧出量を得ることができたのである。惣村の人々は共同で利用し、共有するこの中核的な温泉利用の場、共同湯を「惣湯」として意識した。「惣(総)湯」は日本の温泉地発展史における温泉と土地と人々の三者が共同で織りなし、育み合った、温泉本来の＜共同＞的性格を如実に示すものではないかと考える。

注・参考文献

1）早稲田大学法学部民事法黒木ゼミ（1984）:『叢芳』第６号は、その沿革をまとめている。

2）加賀市史編纂委員会（1978）:『加賀市史通史上巻』加賀市、863頁。

3）前掲2）866頁。

4）前掲2）867～868頁。

5）前掲2）870頁。有馬温泉も長らく入浴できる場所は大きな共同湯一ヶ所のみであった。共同湯が七ヶ所ある城崎温泉でも、人々は共同湯に入りに出かけた。これに不満を持った宿が造反したため、戦後になってようや

く宿に内湯をつくることが認められた経緯がある。このように宿に内湯ができると、前からあった共同湯の方が「外湯」と呼ばれることになる。したがって、外湯という用語は温泉地や共同湯の歴史上紆余曲折を経た結果、共同湯が脇役におかれるようになってからの後発的な言語である。

6）若林喜三郎（1959）:『山中町史』山中町史刊行会、127頁。

7）前掲6）14～15頁。

8）前掲1）5～7頁。

9）野沢組惣代（1992）:『野沢温泉薬師同意縁起』野沢組。

10）井上鋭夫（1968）:『一向一揆の研究』吉川弘文館。

大正期における別府温泉の別荘地開発
Villa Derelopment of Beppu Spa during the Taisho Era

中　山　昭　則*
Akinori NAKAYAMA

キーワード：別府 (Beppu)・温泉地 (spa)・別荘地開発 (villa development)
大正期 (Taisho Era)

1　はじめに

全国屈指の温泉観光地である別府温泉において、大正期に豊富な温泉資源を活用した別荘地開発が行われ、分譲地として販売された区画が、その後の市街地形成に大きな役割を果たしてきたことは、あまり知られていない。

別府市のような豊かな温泉資源を有する都市を対象とした研究は、当然のことながら「温泉観光都市」の側面から分析したものが主流を占めている[1)]。これらの研究は、開発資本、宿泊施設の収容力および入湯客数の推移、入湯客の属性といった問題に関心が集まっている。一方、温泉療養地あるいは保養地としては、湯治場の観点からの分析が多く、温泉観光都市形成のいわば原点として位置付けている場合が多い。その他、温泉地は温泉医療の立場から古くから認識されてきた[2)]。

別府市の場合をみる限り、温泉資源は観光資源や温泉医療の他に、全く異なった次元すでの別荘地分譲の際に、特別な付加価値として利用された。温泉資源を別荘地のみならず企業・団体等の保養所として利用することは、温泉観光都市では広く行われていたのであるが、これに関する研究は管見の限りでは少ない。別府においてもこうした事実がありながら、『別府市誌』においてもその記述は認められず、僅かに高砂（2000）の論考および地元信用金庫の記念誌の記事が目を引くのみである[3)]。そこで、本研究は高砂の研究成果を踏まえて、大正期から昭和初期にかけて開発分譲された別荘地の実態を明らかにし、温泉観光都市の形成における別荘分譲の意義について、特に別府市荘園地区の事例を取り上げて考察する。

2　市街地整備と民間資本の別荘地開発

ここでは、明治から昭和初期の別府市の温泉開発を概観することによって、どのような状況下の元で別荘地開発が実施されていたのかを検討する。

1871(明治4)年には早くも別府港が整備されると、翌年からは大分県は県費を投下して温泉浴場の整備を開始した[4)]。これら新規温泉浴場周辺には、木賃宿や商店が進出してきた。1889(明治22)年には、上総掘り技術(湯突き)の導入によって、温泉掘削技術は飛躍的に進歩した。その後、泉源開発件数は激増し、1911(明治44)年の源泉数は町営24本、私有569本に達している[5)]。別府温泉の源泉開発の大半は、民間投資によって成されてきた。さらに、当時の旅館数139軒からみても私有泉源の数は異常に多く、温泉掘削の多くは利権目的であったと推察できる。こうして旅館や木賃宿、そして商店の増加によって形成された市街地は、歓楽地としての色彩が強かった。これに対して、健全な都市への脱

* 別府大学文学部（Beppu University）

却が望まれ、1909(明治42)年に市区改正案が可決され、併せてその周辺農地も耕地整理によって市域に編入され、近代的な街区が作り上げられた（図1）。

これら街区の内、別府停車場（現ＪＲ別府駅）の西側一帯を占める田の湯や野口地区の

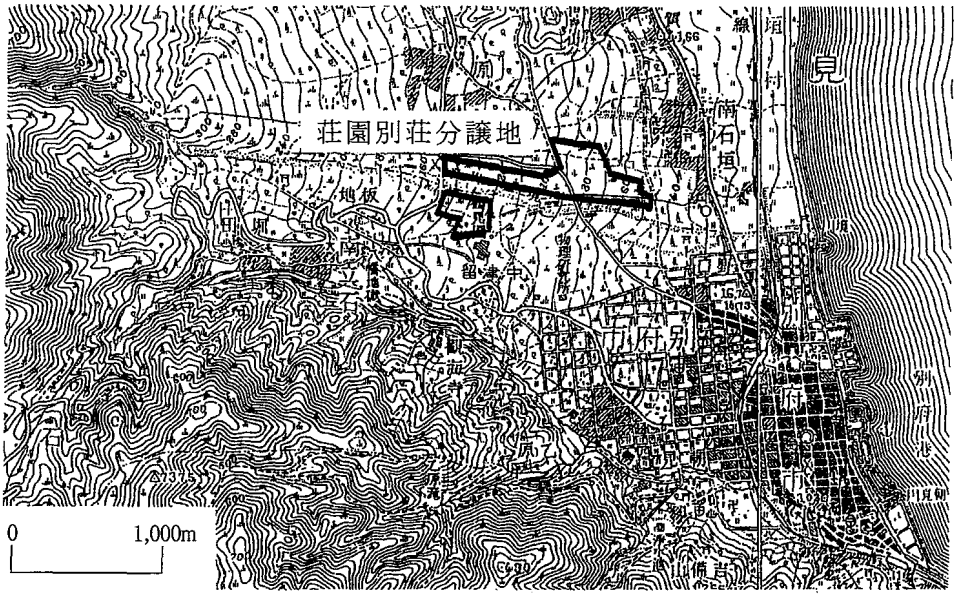


図1　昭和初期の別府市街地（1927年）

（注）大日本帝国陸地測量部5万分の1地形図「大分」「別府」昭和2年修正測量図により作成。

多くは、筑豊炭鉱で財を成した麻生家が所有地していた。市区改正によって整理された土地は、当家によって別荘地として分譲販売され大成功を収めた。

その一方で、別府公園・松原公園といった都市公園も整備され、別府市街地は健全な娯楽都市として生まれ変わった。もとより、別府湾と鶴見岳・高崎山が迫る風光明媚な景観を有する別府温泉には、整然と区画された市街地とそこに分譲された別荘地、大規模な都市公園が新たに立地し、健全な観光地としての価値が備わった。

また、野口・田の湯地区における別荘地分譲の成功を目の当たりにした新興資本家、繊維産業の実業家、筑豊炭田の炭鉱主、海外へ進出した実業家たちは、別府温泉に高い関心を示した。例えば、台湾において鉄道工事で財を成した広島県出身の松本勝太郎は、宝塚を模倣して1925(大正14)年に「鶴見園」を開園させた。ケーブル遊園地(現ラクテンチ)は東京の鉱山会社「木村商事」の手によるものであった[6]。

以上のような発展を支えたのは、言うまでもなく豊富な湯量を誇る温泉資源の存在があったからである。別荘地開発をはじめとする開発者にとって、温泉の確保およびその利権の獲得に奔走することなく開発が可能であった。現に、別府温泉は今日でも1日の湧出量は世界第2位の13万キロリットルで、その源泉数は市内に3,000ヶ所に及ぶ。近年になって、一部の地域でようやく温泉掘削を規制する動きが出てきた程である。

他方では、麻生家の手による別荘地分譲の大成功によって、温泉付き別荘地への需要は伸びた。こうした状況下、日豊線の工事で別府を訪れていた鉄道院の千寿吉彦は、別府周辺の景観の良さに感銘し、1914(大正3)年

に鉄輪温泉付近に「新別府」別荘地を開発した。千寿は開発した別荘地に供給する温泉の泉源として、「海地獄」を買収したとされる[7]。当別荘地は一区画300坪で売り出され、関西の上流階級に人気があったという。

また、大阪出身の多田次平は1920（大正9）年頃、観海寺温泉で「温泉療養邸宅地」とした再開発に着手するとともに、並行して荘園地区を別荘地として開発した。多田は大阪で綿糸相場に失敗し、その後朝鮮半島に渡って保険外交で財を成した人物であるが、別府にやってきてこうした事業に着手した[8]。

3　荘園地区における別荘地開発の経緯

ここでは、これまでの別府温泉の発展の経緯を踏まえて、別荘地開発が行われた一地域である荘園地区の開発経緯について検証する。

前述のとおり、荘園地区の別荘分譲は「別府観海寺土地株式会社」の社長多田次平が推進した。彼は1920（大正9）年頃から境川北岸の保安林として植樹されていた県有林の払い下げを受け、「荘園文化村」の名のもとに別荘地分譲を手がけた。境川は氾濫を繰り返してきた河川で、扇山の麓から直線的に一気に河口まで流下している。こうした地域に大規模な別荘地を造成した背景として、高砂はコストの問題と郊外の松林を活かすことで別荘地としてのイメージを演出したのではないかと推測している。この分譲計画は高級分譲地の文化村地区と一般向け分譲地とに区分され、前者は一区画1,000坪で20区画、後者は300坪で152区画が販売された[9]。販売区画には観海寺温泉から温泉を引いた給湯設備はもちろんのこと、当時では先駆的な施設であった上水道や電灯の設備も整えられていた。また、街区の交差点には噴水も設け、桜・楓・バラなどの植樹も計画されていた。しかし、実際に分譲地を所有したのは、多田ならびに次期経営者の国武金次郎の他は、全て在阪の株主であった。一般からの購入希望者はほとんど現れず、別荘地開発は失敗に終わった。その上、並行して計画していた観海寺温泉の「温泉療養邸宅地」も同様の理由で失敗に終わり、結局温泉旅館街として再出発させている。

多田が別府で開発行為をした理由については断片的な記録しかなく、不明な点が多い。この点について、高砂は、①多田は250万円という当時としては大金を充てて開発している、②多田は開発会社の専務であり、社長は在阪の実業家であった、③多田は巨額な資金を投じて埋め立て事業にも参画している、などの理由から、投資金額は個人レベルでは到底調達できない額であるとして、大阪財界からの指示で動いていたのではないかと推察している[10]。

1929（昭和2）年に多田が死亡すると、同社役員の国武金次郎が社長に就任した。国武は久留米賀絣の大量生産に成功し財を成した人物であった。しかし、多田による事業の相次ぐ失敗によって「別府観海寺土地株式会社」は窮地にあり、大阪財界の役員との間に役員人事をめぐって軋轢が生じていたともいわれている。そして、同社は1933（昭和8）年に解散し、競売にかけられて国武が一括落札し、別荘地開発を引き継いでいる[11]。

国武は「国栄合資会社」を設立し、荘園地区の付加価値を高めるために「九州帝国大学医学部附属温泉治療学研究所（現九州大学生体防御医学研究所）」の誘致に乗り出した。『別府市誌』には、石垣村と隣の朝日村から土地が寄付された旨が記されているが、高砂はこれらの土地は国武が両村に寄付した土地であると指摘している[12]。国武は、いわば村に「恩を売る」ことで将来的な基盤整備が円滑に進むことを念頭に入れたと考えられる。国武は個人的にも九州帝国大学に対して、1日当たり54立方メートル（300石）の温泉の無償給湯、上水道の無償提供という条件を提示した。その結果、誘致は成功し、

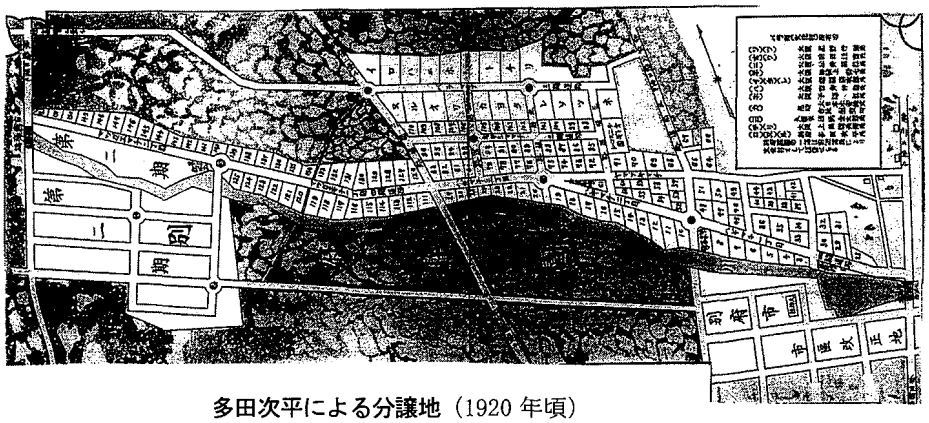
1932（昭和７）年同研究所は開所した。

別荘分譲地は荘園緑ヶ丘や、百花村等の６ブロックに分割して販売された。荘園緑ヶ丘地区を例にみると、中心部に共同温泉を配置し、そこから放射線状に街路を延ばし、一区画100坪で177区画販売している。この区画規模は購買層を朝鮮半島および旧満州等からの引揚者に絞り、彼らの購買力を考慮した結果といわれている。事実購入者の60％はこうした層で占められた[13]。

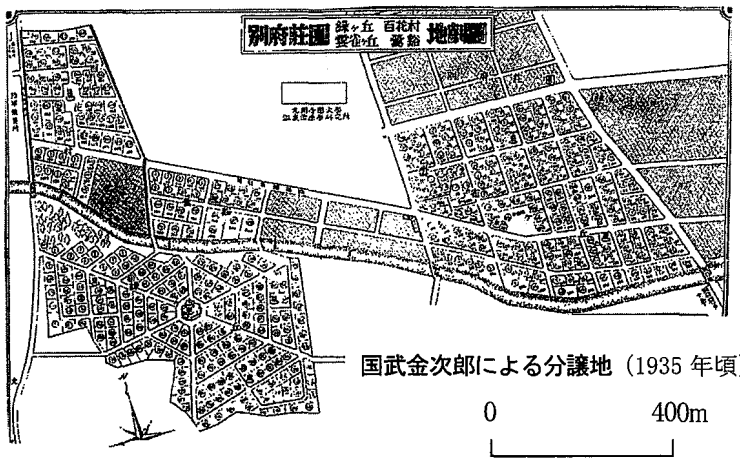
４　温泉観光都市の形成における別荘地分譲の意義

以上検討してきた別荘分譲地は、その後の温泉観光都市別府における市街地の展開にどのような影響を与えたのであろうか。ここでは、現況の地図と比較することで市街地形成における別荘分譲地の意義について考察する。現在の2,500分の１国土基本図に当時別荘地として分譲された地域を重ねてみると、まず、荘園文化村は当時分譲された区画が、今日も土地区画として利用されている状況が読み取れる（図２）。

分譲区画は高級分譲区域で1,000坪単位、一般向け分譲で300坪単位であったので、現在の一般住宅地は別荘地区画をさらに分割して再分譲されたものと思われる。荘園緑ヶ丘地区の当時分譲地の中心となっていた共同浴場は、今日では「六角温泉」として地元自治体が管理する共同浴場として利用されてい



多田次平による分譲地（1920年頃）



国武金次郎による分譲地（1935年頃）

図２　荘園地区の別荘分譲地の案内図（1920・1935年頃）

（注）片木篤他編『近代日本の郊外住宅地』鹿島出版会、506・512頁による。

る。また、そこから放射状に伸びる街路は当時のままで利用され、地図上でもはっきりと記され、周辺の街区とは一線を画した特異な街区を形成している。一区画も100坪単位と当時の他の分譲地と較べるとやや小区画であったことが、結果的にはその後の宅地分譲のスケールと一致したのであろう。しかし、図2をみると多田による開発段階では緑ヶ丘地区は、グリッド状の街区が記されており、放射状の街区は国武によるものと推察される。

さらに、その後拡大していった市街地との関連性を検討する。荘園文化村および緑ヶ丘分譲地周辺部は、全体的に整然とした街路を持つ市街地となっている。ここから南立石地区にかけての市街地は、昭和30年代後半から宅地化が進展した地域であるが、その街路は、今日では旧別荘分譲地と一体化している。また、荘園別荘分譲地の北側に位置する石垣地区は、昭和30年代初めまでは棚田が広がっていたが、その後大規模な区画整備事業によって今日ではグリッド状の区画が広がっている。同様に、現在の東荘園地区も別荘分譲地の街路を延長した形となっている（図3）。

こうしてみると、別荘分譲地として区画された街路は、これらの地区における区画整備事業に影響を及ぼした可能性も指摘でき、別荘地分譲は別府市街地の形成に大きな役割を果たしたと考えられる。

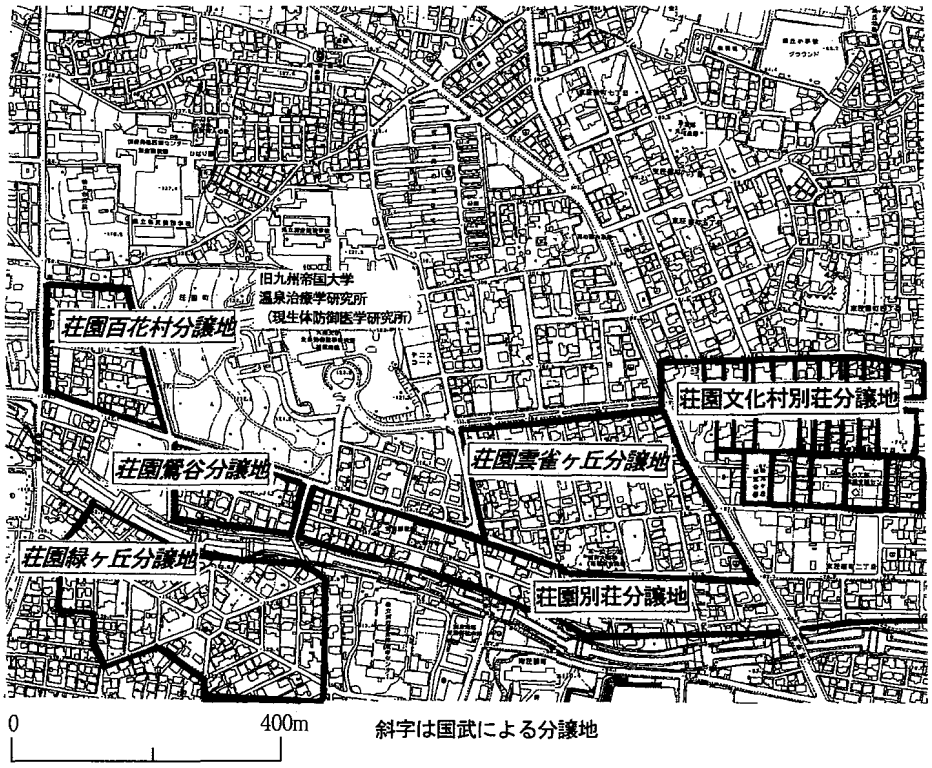


図3　荘園地区別荘分譲地と市街地の現状（2003年）

（注）別府市発行の2,500分の1都市計画図により作成。

5 むすび

以上、別府市における温泉付き別荘地の開発経緯とその意義について検討を行った。

その結果は、以下のようにまとめられる。

①別府市においては、別荘地のみならず温泉観光都市の発展は、「湯突き」による温泉湧出量の飛躍的増大といった資源確保の面と、市区改正といったインフラ整備に拠るところが大きい。

②以上の状況から、実業家たちの間で別府温泉に対する投資が盛んに行われた。別府温泉の開発については、外来の民間資本によって大規模に行われた実態が、別荘地分譲の経緯の中から浮き彫りになった。

③別荘地開発によって区画整理された街区は、市区改正を取り込む形で発展を遂げた野口・田の湯地区と、市街地から離れて「田園地区」として売り出した新別府・荘園地区とに区分できる。

④これらの開発地のうち、荘園地区は周辺地区が市街化していく段階において別荘分譲の街区を拡張する形で開発がなされてきた。今日では、その整然とした市街地は狭い路地の多い別府市街地の中にあって、資産価値と人気ともに高い地区となっている。このように、別荘開発地はその後の市街地形成に大きな影響を与えている。

今後の課題としては、荘園地区別荘地開発の「理想像」とその後の現実について検討を加えねばならない。また、戦後の都市計画策定の中で、別荘分譲地はどのように扱われたのかについても検討する必要があろう。

本稿の骨子は日本温泉地域学会第1回研究発表大会（2003年5月12日、於草津温泉）において発表した。

注・参考文献

1）兼子俊一（1961）:「温泉都市・別府」藤岡謙二郎編『九州地方』大明堂、206～220頁。
山村順次（1981）:「温泉観光都市・別府の地域変化」千葉大学教育学部研究紀要、第30巻第1部、129～155頁。
2）例えば、北海道大学は登別温泉、東北大学は鳴子温泉、九州大学は別府温泉に温泉医療施設を設置していた。
3）高砂淳（2000）:「温泉リゾートと郊外地開発ー観海寺、別府荘園文化村計画」別府市、片木篤他編『近代日本の郊外住宅地』鹿島出版会、499～514頁。
大分みらい信用金庫（2002）:『ふるさとの遺産』シリーズ。
4）主な共同浴場としては、1875（明治5）年の不老泉、1879（明治12）年の竹瓦温泉が挙げられる。
5）高砂淳（2002）:「別府市における近代の市街地と別荘地の開発」、『ふるさとの遺産』大分みらい信用金庫、97頁。
6）前掲4)、101頁。
7）大分みらい信用金庫（2002）:『ふるさとの遺産』、74～75頁。
8）前掲5)、105頁。
9）前掲3)、高砂（2000)、513頁。
10）前掲5)、106頁。
11）前掲5)、106頁。
12）前掲3)、高砂（2000)、510頁。
13）前掲3)、高砂（2000)、513頁。

別府温泉郷における街づくりの動向

The New Trend of Activation for Tourism Development in Beppu Spa

浦　　達　雄*
Tatsuo URA

キーワード：別府 (Beppu)・温泉 (spa)・街づくり (tourism development)・イベント (event)
トラスト (trust)・地域通貨 (eco-money)

1　はじめに

(1) 研究の背景

ポストバブル経済期において、日本の温泉地は二極化が一段と進行している。いま人気の温泉地は、全国的には秘湯系や癒し系の小規模な温泉地となる。九州中部を事例にすると、大分県の由布院温泉や長湯温泉、熊本県の黒川温泉などがあげられよう[1)]。いずれの温泉地も長い間停滞傾向を示した温泉地であり、由布院に至っては奥別府と称されたマイナーな時代が続いた。しかし、これらの温泉地は安定経済成長期以降、いまから考えれば本物の温泉（湯）と自然や人文環境という地域資源（言葉を変えればシンボル）を街づくりに活かすことで着実な進歩を遂げてきた。

いずれにしても、こうした秘湯系や癒し系の温泉地は、熱海や別府などの歓楽系の有名温泉地が停滞する中で、消費者の心理を巧みにとらえたと言えよう。これには、バブル経済期以降のマスコミによる温泉ブームの影響も大きい。ちなみに、由布院温泉は由布岳と田園風景などの自然環境、映画祭などの各種イベント、美術館を主体とした各種アート施設など、黒川温泉は山のさりげない風景と樹木・露天風呂など、長湯温泉は日本一の炭酸泉、ドイツとの交流などをテーマとして街づくりに成功した。黒川温泉では、デフレ経済下にあるとはいえ、年商ベースで二桁成長の温泉旅館が出現している。

これに対して、停滞する歓楽系の有名温泉地は、高度経済成長期において団体客や宴会客などで稼いだ温泉地が大半で、「夢よもう一度型」が多い。時代の変化を確実に読みきれない旧態依然とした経営体質の旅館もいまだに多く、客足や客単価の減少に悩まされている。

(2) 研究の目的

本研究の目的は、別府温泉郷における最近の街づくりの動向を把握することである。高度経済成長期における日本の温泉地では、一部を除いて街づくりという概念は乏しく、いわば旅館づくりが中心であったと筆者は考えている。その結果、温泉旅館の大型化が進み、さらに売店や料飲店など付帯施設の充実で宿泊客の囲い込みが始まり、温泉街は疲弊することになった。そのため、熱海・伊東・別府などの歓楽型の温泉観光地では一部の大規模旅館が繁栄し、商店街、言葉を変えれば温泉集落が次第にさびれたのである。

特にポストバブル経済期において、高度経済成長期を中心に繁栄した熱海や別府などの大規模旅館は、次第に団体客が減少することになった。つまり客層の変化、具体的には団体客から小間客への対応が出来ず、大規模旅館は客足の停滞を招いたのである。団体客の減少による大規模旅館の不振などが原因で、

* 大阪明浄大学観光学部（Osaka Meijo University）

気がつけば温泉地全体が停滞・減少傾向を示したと思われる。その結果、温泉地における観光産業の中核を占める旅館業の転業・廃業がさらに進展したのである。ここでは、長期低落傾向に悩む別府温泉郷を事例にして、別府八湯温泉泊覧会（ハットウ・オンパク）を中心とした街づくりの動向について、追求することにしよう。このオンパクが、別府再浮揚の切り札になると判断したからである。

2　別府八湯温泉泊覧会

(1) オンパクの開催

別府温泉郷では、この数年間、従来の別府では見られなかった新しいタイプの街づくりが顕在化してきた。その中間的な成果の集大成が別府八湯温泉泊覧会（主催は別府八湯温泉泊覧会実行委員会。共済は別府市旅館ホテル組合連合会・別府市観光協会など）となって現れた。表1は、別府温泉を中心とした最近の観光関係略年表（抜粋）である。主な出来事を中心に作成したが、オンパクの開催と前後して、新しいイベントやビジネスが登場していることが分かる。

第1回のオンパクは2001（平成13）年10月19日から28日まで開催された。別府の理想像を求めたイベントとしてスタート

表1　別府温泉を中心とした最近の観光関係略年表（1994～2003年）

西暦	イベント	施　設	組　織
1994年	12月23日・24日。第1回べっぷクリスマスHANABIファンタジア開催。(以後、毎年)		
1996年	8月8日。別府産業経営研究会(産研)、別府八湯勝手に独立宣言。	3月25日。別府市営鶴寿泉改修。(明礬温泉)	
1997年		4月。自然ふれあい温泉館開業。(柴石温泉) 4月24日。増井海運、ホテルシーウェーブ別府開業。投資額は10億円。(別府温泉) 6月1日。亀の井イン別府開業。(別府温泉) 7月2日。亀の井ホテル、新築開業。投資額は45億円。(別府温泉)	2月26日。鉄輪女将会（かんなめ会）設立。(鉄輪温泉) 4月。別府市外湯協議会設立。 5月27日。別府八湯メーリングリスト（八湯ＭＬ）配信開始。
1998年	9月27日。産研、別府八湯地域づくりフォーラム『よみがえるか竹瓦温泉』～別府温泉再生への道～開催。 11月10日。別府八湯ＯＮＳＥＮ文化国際ミーティング開催。(運輸省関連事業) 11月23日～30日。第1回別府アルゲリッチ音楽祭開催。	10月1日。北浜横丁を竹瓦温泉横丁に名称変更。(竹瓦温泉界隈) 10月10日。北浜温泉テルマス開業。総事業費は10億円。(別府温泉)	5月。九州郵政局、「別府八湯郵便絵はがき」発売。(1組8枚。650円) 9月。別府八湯熊八会ほか、「別府原風景・八湯レトロ絵はがき」発売。 12月2日。別府八湯竹瓦倶楽部設立。地元住民約20人が参加。(竹瓦温泉界隈)
1999年	7月25日。竹瓦倶楽部、竹瓦界隈路地裏散歩開始。以後、鉄輪、山の手、浜脇などに拡大。 8月26日。別府市旅館組合連合会、風呂の日開始。260円での入湯。	8月5日。ＴＡＫＥＹＡ開業。竹瓦温泉前の軽食店。(竹瓦温泉界隈) 10月。平野資料館開設。(竹瓦温泉界隈) 12月31日。温泉閣、新館と男女別露天風呂開業。(鉄輪温泉)	9月9日。竹瓦倶楽部、別府八湯アチチ探検隊結成。 11月15P。国際ビジネスネットワーク設立。
2000年	7月20日。第1回別府八湯ゆかたdeピンポン開催。(竹瓦温泉界隈) 10月20日～29日。第1回路地裏文化祭開催。(裏が表の10日間)(竹瓦温泉界隈) 12月8日。竹瓦倶楽部、夜の路地裏散歩開催。以後、定例化。(竹瓦温泉界隈)	1月10日。湯・友サロン岸開業。竹瓦温泉前のサロン。(竹瓦温泉界隈) 10月6日。かなわ荘、旅籠屋精涼開業。会員制ホテルを買収して改装。(鉄輪温泉)	4月1日。ヤングセンター観光バス営業開始。(鉄輪温泉) 6月22日。竹瓦倶楽部、湯の町ママさんガイド設立。会員は約30人。 6月25日。別府市旅館組合連合会、別府八湯温泉本発行。300円。無料入湯券付。(以後、毎年)
2001年	3月24日～4月2日。温泉まつりグレードアップ。前半7日間は温泉文化祭、後半3日間は従来の温泉祭り。 3月25日。別府八湯温泉道88ヶ所めぐり開始 3月31日、初代名人誕生。		

2001年	4月14日～22日。第3回アルゲリッチ音楽祭開催。 7月8日。浜田温泉問題を考えたい別府市民の会、第1回浜田温泉風呂端会議開催。 8月5日。第2回別府八湯ゆかたｄｅピンポン開催。(竹瓦温泉界隈) 10月19日～28日。第1回別府八湯温泉泊覧会(通称、ハットウ・オンパク)開催。10日間の日程、約200のプログラムで、約1万人が参加。 10月19日～28日。第2回路地裏文化祭開催。(裏が表の10日間)。(竹瓦温泉界隈) 12月8日。竹瓦倶楽部、お色気Ａ級散歩開始以後、路地裏文化際などイベント時に開催。	4月20日。ゴールドワン(東京都)、昭和園開業(買収)。 5月19日。二十八万石再開。経営者交代。(竹瓦温泉界隈) 6月22日。竹瓦小路で、竹の照明と竹瓦屋根の看板のお披露目会開催。この2年間で、店舗は6軒から13軒になった。 7月26日。アホロートル開業。貸席を利用した軽食店。(楠温泉界隈) 8月30日。新玉旅館、新規開業。(浜脇温泉) 9月6日。ホテル白雲山荘、自己破産を申請。負債総額は約30億円。(観海寺温泉) 10月19日。喫茶新貝、流川文庫開設。(楠温泉界隈) 11月20日。別府ホテル清風、展望露天風呂の営業開始。(別府温泉) 11月23日。ホテルふじ、民事再生法の適用を申請。負債額は約6億7000万円。経営は続行。(別府温泉) 12月23日。南国水産(鹿児島市)、喜界島くろちゅう会館開業。倒産したホテルを買収。(別府温泉)	4月27日。別府市観光協会、観光ボランティアガイド養成講座「語り部の会」開講。 6月21日。ロングステイべっぷ研究会設立。(通称ＬＳＢ研究会)(会員数14社) 7月18日。鉄輪湯けむり倶楽部設立。 9月1日。4ママ、浜田温泉館修復保存の会設立。署名活動開始。9月11日、第1回署名5833人分提出。10月31日、浜田温泉館を温泉文化遺産として使って守る会に改称。
2002年	4月1日。大分個人ひかり会、温泉道名人タクシー開始。 4月1日～7日。別府八湯温泉まつり開催。温泉文化系イベントの充実。 4月3日。別府市旅館ホテル組合連合会、ほっとマンマの日実施。 6月2日～16日。第2回別府八湯温泉泊覧会開催。 6月2日～28日。第3回路地裏文化祭開催。 6月7日～16日。第1回鉄輪湯けむり文化祭催。(鉄輪温泉) 8月25日。第3回別府八湯ゆかたdeピンポン　開催。(竹瓦温泉界隈) 9月29日。別府八湯トラスト・シンポジウム開催。 10月1日～31日。第4回路地裏文化祭開催。路地裏食堂、竹瓦学校など。(竹瓦温泉界隈) 10月4日～27日。第3回別府八湯温泉泊覧会開催	2月1日。鉄輪豚まん本舗開業。(鉄輪温泉) 4月。大分県トラック協会、ホテル芙蓉倶楽部を買収。(堀田温泉) 4月1日。別府市営浜田温泉開業。(亀川温川温泉) 4月10日。海浜砂湯リニューアル。(亀川温泉) 4月30日。はりきゅうまさーじ処陶子堂開業。(竹瓦温泉界隈) 5月31日。鶴見園グランドホテル休業。借入金は60億円。(観海寺温泉) 7月20日。ホテル清海荘、屋上に天空露天風呂(家族湯4ヶ所)開業。(別府温泉) 9月1日。杉乃井ホテル、新体制でスタート。出資・所有はオリックス・リアルエステート、運営は加森観光。債権の買収額は22億円。(観海寺温泉) 12月6日。別府観光産業、鬼石坊主地獄開業。40年ぶりに復活。(鉄輪温泉)	1月16日。竹瓦倶楽部、平成14年度地域づくり総務大臣表彰式で「地域づくり団体賞」受賞。 3月1日。別府市、歴史的建造物の保存等に関する調査委員会発足。浜田温泉館を優先調査。 3月29日。別府市郵政まちづくり協議会、文化遺跡案内石碑設置。(11ヶ所) 6月11日。別府八湯温泉泊覧会(ハットウ・オンパク)の実行委員会(鶴田浩一郎委員長)、第5回人に優しい地域の宿づくり賞(全国旅館生活衛生同業組合連合会主催)で、厚生労働大臣賞を受賞。 12月11日。鉄輪湯けむり倶楽部、ＮＰＯ法人に認証。
2003年	2月1日。北浜湯めぐりの宿(北浜湯めぐりクーポン)開始。10旅館が参加。(別府温泉) 2月1日。別府八湯の宝を守り育てる会(通称・別府八湯トラスト)、街歩きツアー「別府八湯ウオーク」の定例化実験開始。 4月1日～7日。別府八湯温泉まつり開催。 5月1日～11日。第5回別府アルゲリッチ音楽祭開催。 5月9日～25日。第4回別府八湯温泉泊覧会開催。全63講座、170のプログラム。 6月28日。別府八湯トラスト臨時総会。	2月1日。鉄輪湯けむり倶楽部、湯けむりライトアップ散策開始。(鉄輪温泉) 2月12日。ケーブルラクテンチ(別府国際観光経営)、売却方針決定。 2月27日。サンシーサイドホテル、大分地裁に自己破産を申請。(別府温泉) 3月1日。西鉄リゾートイン別府開業。総投資額は7億円。(別府温泉) 4月1日。照湯温泉開業。春木川渓流環境周辺整備モデル事業。整備費は約1億円。(明礬温泉) 4月10日。別府市営堀田温泉開業。	4月1日。別府ＯＮＳＥＮ資源研究開発国際協同組合(略称ボルディック)設立。 4月1日。アチチ中央銀行(アチチ探検隊)、地域通貨「湯路」発行。

(注) 地元紙、別府八湯メーリングリストなどにより作成。

したもので、1996(平成８)年から続けてきた研究会や諸活動の成果を活かすことになった。その後、回を重ねて４回目は2003年５月９日から25日まで開催された。その間、温泉所在地の自治体を始め、各地の観光協会などの視察が増加し、オンパクの有効性を実証することになった。オンパクとは温泉泊覧会の略称である。宿泊客を増やす意味を込めて、「宿泊」の「泊」を用いている。

具体的な活動組織として、別府八湯竹瓦倶楽部[2)]・国際ビジネスネットワーク・別府八湯ＯＮＳＥＮ地療法研究会・ロングステイべっぷ研究会(通称ＬＳＢ研究会)・ヘルシーメニュー研究会・菓子創造研究会(菓創研)・愛酎会・別府市外湯協議会・かんなめ(鉄輪女将)会・鉄輪湯けむり倶楽部・別府八湯温泉道実行委員会・別府路地裏文化祭実行委員会などがある。

別府の街づくりにとって、1996年の意味は大きい。その理由は1996年、つまり平成８年の８月８日８時８分８秒に、別府の街づくり組織としては比較的古い別府産業経営研究会(産研)が「別府八湯勝手に独立宣言」を行ったのである。その後、シンポジウムの開催などを行い、街づくりの新しい組織として、1998年12月２日に別府八湯竹瓦倶楽部(以下、竹瓦倶楽部)が誕生した。それまで旧態依然とした組織は存在していたが、別府らしく各種のシガラミで思うような成果をあげることは出来なかった。竹瓦倶楽部は、まず自分たちが暮らす地域を知るために、1999年７月25日に竹瓦界隈路地裏散歩を開始し、別府八湯ウォークに先鞭をつけることになった。

ロングステイべっぷ研究会は、2000年４月に開学した立命館アジア太平洋大学の畠田展行研究室を中心として2001年６月21日に成立をみた。いわば産学共同の組織と言えよう。この会の目的は、別府における長期滞在型観光の実現を図ることである。すなわち、団塊の世代を含む50～60代、主として定年退職者を対象として長期滞在型観光の可能性を検討すること、具体的な営業活動に結びつけること、長期滞在型観光の普及・啓発を行うことなどとなる。会員は大学(1校)・ホテル旅館(８社)・航空会社(１社)・旅行会社(２社)・観光協会等(２機関)など14会員を数える。会合は原則月１回の例会を開催し、2003年５月現在までに17回に至った。ロングステイ関係のツアーは、オンパク期間中とオフシーズンに２回ほど実施したが、大量集客には至らず、時期尚早の企画となった。

(2) オンパクの内容

オンパクの目的は、別府八湯の新たな魅力の創造、観光交流人口の増加、温泉保養・長期滞在、八湯エリアの再認識・体験、健康増進、八湯のＰＲなどとなる。そのテーマは温泉・健康・癒し・歩く・食などに求めている。

具体的にみると、「温泉」では天然温泉の体験・別府八湯温泉道・風呂の日・湯めぐりアカデミーなど、「健康」では水中ウォーキング・ファンゴエステ・糖尿病コースなど、「癒し」ではアロマテラピーなど、「歩く」では街歩きなど、「食」ではＢ級グルメ・ヘルシーメニュー・竹瓦路地裏食堂・鉄輪地獄蒸し食堂などとなる。第１回のオンパクでは約200のプログラムを開催し、その結果、期間中に約１万人を集客した。講座の講師は40人以上であり、別府を中心とした人材が活用されたのである。

3　新しい動き

(1) 別府八湯の宝を守り育てる会(別府八湯トラスト)

こうしたオンパクの開催と共に、街づくり関連で新しい動きが出てきた。その一つが「別府八湯トラスト」である。別府八湯トラストは浜田温泉館の保存活動などを通して、問題意識が高揚した。浜田温泉館は道後温泉のような寺院造りで、1935(昭和10)年に建築された。温泉施設としては、1938(昭和13)年建築の竹瓦温泉と共に別府温泉郷を代表す

るシンボル的な施設である。現在、目の前に新しい浜田温泉が造られて、この文化財級の浜田温泉館は取り壊しの運命にさらされている。保存の署名運動は現在でも続けられており、別府市当局の対応が注目されている。

八湯トラスト運動は、当初、別府八湯メーリングリスト（八湯ＭＬ）の配信でスタートし、2001年11月27日、「八湯トラストメーリングリスト」による任意の活動となった。なお、八湯ＭＬは別府を愛する者の集まりで、現在の会員数は公称400人、毎日100通前後のメールが配信されている[3)]。

2002年9月29日、別府八湯トラスト設立準備委員会は別府八湯トラスト・シンポジウムを開催し、別府八湯の温泉文化を伝える建物などを文化遺産として残し、これからの街づくりに活用していくことを確認した。具体的な活動の成果には、2003年2月1日以降開催の街歩きツアー「別府八湯ウォーク」の定例化実験がある。「歩いて守ろう別府八湯の宝物」をテーマに、観光ボランティアガイド養成講座「語り部の会」（別府市観光協会主催）と連携した。別府八湯トラストは2003年4月8日に役員人事も確定し、2003年4月18日に組織として正式に設立した。先の市長選では新市長も決定し、さらに6月28日には新市長を巻き込んでの八湯トラストの臨時総会が行われた。年内には、ＮＰＯ法人化も計画している。

2002年秋には、1911年（明治44）築のＪＲ東別府駅の保存運動を行った。ＪＲ側は老朽化した東別府駅の取り壊しを計画したが、トラストのメンバーと地元自治会などで早急な対応が行われた。2002年10月24日、浜脇地区の町内会長による別府市側への要望などもあって、別府市当局も速やかに対応した。浜脇では旧浜脇温泉の取り壊しに対しての反省が多く、こうした素早い対応となったと言えよう。2003年2月には、別府市指定の文化財として修復保存が決定した。2千数百万の改修費は別府市とＪＲ側が半額ずつ負担することになった。

(2) 地域通貨

街づくり関連の一番新しい動きとして、地域通貨がある。別府では、2003年4月1日に商品割引券や共同浴場の入湯券として使える地域通貨が発行された。通貨名はお湯の「湯」、道路の「路」と書いてユーロと読ませる。1湯路はほぼ100円に相当するが、これは竹瓦倶楽部のアイデアで、同倶楽部から派生した別府八湯アチチ探検隊の隊長を総裁とするアチチ中央銀行が管理・運営を担当する。湯路は商品割引券や共同浴場の入湯券として使え、当初協賛する参加施設は全体で約30ヶ所、その内、温泉施設では11ヶ所の共同湯が参加し、1湯路で入湯が出来る。飲食店では、1人当たり1000円以上の飲食の場合は、1湯路で100円引きとなる。紙幣には、別府観光の父と称される油屋熊八の肖像が描かれている。

商店などが湯路に加盟する場合は、初回の参加費用として2000円を支払う。そうすると、100枚分の湯路が手に入ることになる。メリットとしては客層の拡大、キャンペーンとして配布することによる商店のイメージアップ、湯路ガイドへの掲載による宣伝効果の向上などがある。

(3) 新しいビジネスの創出

こうした街づくりの新しい動きに対して、観光産業の中核を占めるはずのホテル旅館の業績は芳しいとは言えない。2002年だけでも10軒を超えるホテル旅館が転廃業などをしている。休業、経営者交代、マンション業者への転売などである。しかし、ホテル旅館業以外ではオンパクと連動した関連産業が芽生えつつある。鉄輪温泉では、2002年2月1日に街歩きから派生した「鉄輪豚まん本舗」が誕生した。旅館の女将をリーダーとした店舗で、観光客の人気を集めつつある。竹瓦温泉界隈では竹瓦小路を中心として、すでに「ＴＡＫＥＹＡ」（飲食店）、「湯・友サロン岸」（サロン）などが開業している。2002年4月29

日には「はりきゅうまっさーじ処陶子堂」(クイックマッサージ)が開業し、賑わいを増している。

一方、新規団体として「別府ＯＮＳＥＮ資源研究開発国際協同組合(略称ボルディック)が2003年4月1日に誕生した。この団体のルーツは1999年11月15日に設立した「国際ビジネスネットワーク」となる。ファンゴの商品化を手がける任意団体で、1998年から始まった当時の運輸省の別府ONSEN文化国際交流事業、日本貿易振興会(ジェトロ)の地域間産業交流事業などが契機となって設立した。

ボルディックの目的は、ファンゴ(温泉泥)をはじめとする温泉資源の新たな活用法をまちづくり財と位置付け、その研究・保護・育成を図ることである。具体的には、入浴以外の活用法を研究・開発して、新たな地域産業を創出し、別府の街づくりに活かすことが目的となる。中でも、別府八湯の温泉泥を使ったファンゴエステの普及やブランド化に取り組み、地域の財産として育てていく。発起人は、別府市内のホテル旅館や美容院の代表など4人で、組合員はホテル旅館、観光施設、美容院など9社となる。今後は、別府八湯ファンゴエステの商標取得に取り組み、現在、ホテル1施設で実施しているエステを2003年10月には5施設までに拡大する計画である。

4　むすび

別府温泉郷における街づくりの最近の動向について事例を中心として追求してきたが、その結果、次の点が明らかになった。

①別府温泉郷における最近の街づくりは、路地裏散歩、豊富な温泉を活かす温泉道、オンパクの開催など、別府らしさを活かしたものである。これは黒川の露天風呂、長湯の日本一の炭酸泉などを活かした街づくりに相当しており、地域資源を活かすという観点では同様の傾向にある。

②別府八湯温泉泊覧会(オンパク)の開催は、ここ数年間の街づくりの活動について、現時点での集大成となった。

③オンパクの開催に当たっては、別府八湯竹瓦倶楽部・ロングステイべっぷ研究会・鉄輪湯けむり倶楽部・別府八湯温泉道など、ここ数年の間に結成された新しい組織や研究会などが関係している。

④別府温泉郷の街づくりは、ハード系(ハコモノの建設など)ではなく、地域に密着したソフト系(イベントの開催など)が主流を占めている。資本よりもアイデアを投入する傾向にある。

⑤街歩きやオンパク関連で、鉄輪豚まん本舗やボルディックなどのように、新しい店舗やビジネスなどが登場した。

⑥さらには、別府八湯トラスト運動や地域通貨の発行など、在るものを活かす街づかい型の街づくりが始まった。

⑦こうした活動は、マスメディアに取り上げられる機会が増えており、歓楽がイメージの旧態依然とした別府温泉郷ではなく、今後の別府温泉郷の方向性について、新機軸を示すことになった。

⑧旧来型の温泉観光地が全国的に停滞する中で、別府はこれまで蓄積された地域資源を活かすことで、街づくりが始まった。いわゆる温泉＋&の発想での街づくりである。今後の方向性を模索する温泉地において、混沌とする未来に対して望みを繋ぐ話題やヒントを提供することになった。

注・参考文献

1) 山村順次(1998):『新版・日本の温泉地ーその発達・現状とあり方』日本温泉協会、239頁。
2) 浦　達雄(2002):「別府温泉郷における新しい観光の動向ー別府八湯竹瓦倶楽部の活動を中心としてー」総合観光研究、第1号、155～162頁。
3) 八湯ＭＬは、街づくりに関する情報が多い。具体的には、オンパクのイベント関連、旧浜田温泉館の活用保存問題、湯路、内成の棚田などの話題からなる。

温泉利用者向け泉質名表記の現状と課題

The Present Situation and Problems on the Expession of Characteristics of Thermal Waters for Visitors to Spa

古　田　靖　志*
Yasushi FURUTA

キーワード：温泉情報雑誌 (spa magazine)・パンフレット (pamphlet)
泉質名 (characteristics of thermal waters)
泉質名表記 (expression of characteristics of thermal waters)

1　はじめに

相変わらずの温泉ブームであるが、最近特に、これまでのブームとは一線を画するかのように、旅行雑誌や温泉情報誌等で「本物の温泉」とか「泉質主義」といった、温泉そのものに目を向けた言葉を目にするようになってきた。

布山（2002）は、日本温泉協会の主催する「第43回旅と温泉展」（2001年3月）において行った「温泉そのものについての志向性」に関するアンケート調査の結果、「温泉そのものに関心がある」と回答した人が98.4%にものぼるとしている。さらに、同アンケートの「泉質についての情報必要度」の質問については、「非常に必要」と回答した人が49.3%、「やや必要」と回答した人が41.7%で、9割以上の人々が泉質についての情報を必要としていると記している[1]。また、筆者が2003年に全国の400人を対象に行った「温泉の認識に関するアンケート調査（未公表）」では、「どのような基準で行く温泉を決めるか」という設問に対して、およそ25%の人が「泉質が良いかどうか」と回答している。

このことからも明らかなように、温泉利用者の目は確実に温泉そのものに向いており、その必然として泉質に関する情報を求めている姿を伺うことができる。

ところが、筆者が時折目を通す温泉情報雑誌やTVの旅番組などでは、温泉が紹介されても泉質が紹介されなかったり、泉質名が正しく表記されていないことが少なくなく、泉質の情報を求めている利用者に泉質に関する情報が正しく提供されているのか疑問が湧いてきた。

そこで今回の研究では、温泉利用者向けのさまざまな種類の「情報源」の泉質名表記に着目し、温泉の泉質に関する情報がどのように利用者に提供されているのか、その現状を明らかにすると共に、泉質名表記に関する課題を明確にしようと考えた。

2　調査の方法

布山（2000）は、温泉利用者が訪れようとする温泉地や宿泊しようとする宿の情報を得る手段として、ガイドブックが61.4%と最も多く、次いで雑誌・旅行会社という順であり、活字媒体によるところが大きいとしている[2]。

今回の研究では、この報告を踏まえ、温泉利用者が訪れようとする温泉を選択する際に利用している可能性の高い温泉のガイドブックや旅行雑誌（月刊誌および季刊誌）を対象に、それらにどように泉質名が記載されてい

* 岐阜県博物館（Gifu Prefectural Museum）

るか調査した。調査対象としたガイドブックや旅行雑誌は、全国の書店の店頭に並ぶものの中から購入した月刊旅行雑誌２誌、季刊温泉情報誌１誌（２号分に当たる２冊）、温泉情報誌６誌の計７種類８冊である。

調査内容は、これら８冊に記載されている温泉の泉質名について、①泉質名が表１の『鉱泉分析法指針（改訂）』（環境省自然環境局，2002）の新旧泉質名対照表に記された新旧どちらかの泉質名、または掲示用泉質名および略記新泉質名を使って正しく表記されている割合（%）、②同新旧泉質名対照表に記された新泉質名で表記されている割合（%）、③同新旧泉質名対照表に記された旧泉質名で表記されている割合（%）、④同新旧泉質名対照表に記された掲示用新泉質名で表記されている割合（%）、⑤①～④以外の独自の“泉質名”の使用の状況などである。

表１　「鉱泉分析法指針（改訂）」による新旧泉質名対照表の泉質名表記例（2002 年）

掲示用泉質名	旧泉質名	新泉質名	略記新泉質名
単純温泉	1　単純温泉	単純温泉、アルカリ性単純温泉	
二酸化炭素泉	2　単純炭酸泉	単純二酸化炭素泉	単純 CO_2 泉
炭酸水素塩泉	3　重炭酸土類泉	カルシウム(・マグネシウム)－炭酸水素塩泉	Ca（・Mg）－ HCO_3 泉
	4　重曹泉	ナトリウム－炭酸水素塩泉	Na － HCO_3 泉
塩化物泉	5　食塩泉	ナトリウム－塩化物泉	Na －Ｃｌ泉
硫酸塩泉	6　硫酸塩泉	硫酸塩泉	SO_4 泉
	芒硝泉	ナトリウム－硫酸塩泉	Na － SO_4 泉
含鉄泉	7　炭酸鉄泉	鉄（Ⅱ）－炭酸水素塩泉	Fe(Ⅱ) － HCO_3 泉
	8　緑礬泉	鉄（Ⅱ）－硫酸塩泉	Fe(Ⅱ) － SO_4 泉
硫黄泉	9　硫黄泉	硫黄泉	単純Ｓ泉
	硫化水素泉	硫黄泉（硫化水素型）	他単純Ｓ泉（硫化水素型）
酸性泉	10　酸性泉	単純酸性泉	単純酸性泉
放射能泉	11　放射能泉	単純弱放射能泉、単純放射能泉	単純弱 Rn 泉、他
		含弱放射能－○－○泉、含放射能－○－○泉、	含弱 Rn －○－○泉、他

（注）環境省自然環境局『鉱泉分析法指針（改定）』（2002 年）による。

次いで、温泉利用者が訪れようとする宿泊先や温泉施設を選定する際に利用していると思われる旅館などの宿泊施設や日帰り温泉施設のパンフレット、温泉地の観光協会などが発行しているパンフレットについて検討した。これらを旅行会社や観光協会および個々の施設から取り寄せ、⑥旅館などの宿泊施設発行のパンフレットに泉質名が記載されている割合（%）、⑦日帰り温泉施設発行のパンフレットに泉質名が記載されている割合、⑧協会など発行のパンフレットに泉質名が記載されている割合（%）、⑨旅館などの宿泊施設や日帰り温泉施設、協会などが発行するパンフレットの各総数のうち、「鉱泉分析法指針（改訂）」（環境省自然環境局，2002）による新旧泉質名対照表に記された新旧どちらかの泉質名、または掲示用泉質名および略記新泉質名を使って、泉質名が正しく表記されている割合（%）、⑩パンフレットにみられる泉質名表記の誤りの傾向、⑪パンフレットの各総数のうち新旧泉質名対照表に記された新泉質名で表記されている割合（%）、⑫パンフレットの各総数のうち新旧泉質名対照表に記された旧泉質名で表記されている割合

(%) などについて調べた。

これらの調査から、泉質に関する情報提供が「泉質名」を使用して成されているかどうか、また、使用されている「泉質名」の表記は「鉱泉分析法指針（改訂)」による新旧泉質名対照表に記された4種類のいずれを採択しているか、さらにそれらの「泉質名」は新旧泉質名対照表に記されている泉質名を使用して正しく表記されているかという観点についてまとめた。そして、利用者向けの泉質名表示がどのようなかたちで提供されているのか、その傾向を考察するとともに、利用者向けの泉質名表記の課題を明確にしようとした。

3　調査の結果

(1) 温泉ガイドブック・旅行雑誌にみる泉質名表示

全国の書店の店頭に並ぶものの中から購入した月刊旅行雑誌2誌、季刊温泉情報誌1誌（2号分に当たる2冊)、温泉情報誌6誌の計7種類8冊のガイドブックなどにおける泉質名の記載について、各誌毎に前章の①～⑤の各観点から詳細に調べた。

泉質名（泉質名に相当すると思われる表記を含む）の記載総数は764であった。そのうち「鉱泉分析法指針（改訂)」による新旧泉質名対照表に記された新旧どちらかの泉質名、または掲示用泉質名および略記新泉質名を使って、泉質名が正しく表記されているのは380であり、これは泉質名記載総数の約50%に相当する。

各誌ごとの泉質名記載総数および新旧泉質名対照表に記された泉質名を使って泉質名が正しく表記されている割合（%）を表2に示す。

これによると、泉質名が正しく表記されている割合は、わずか10%台の雑誌から100%に近い雑誌までばらつきがあり、100%に近いG雑誌を除くと、すべてが50%台以下という低いポイントであった。このことは、一冊の雑誌に記載されている全ての泉質名表記のうち、少なくとも4割以上が誤った泉質名表記となっていることを示唆するものである。

表2　温泉情報雑誌にみる泉質名表示の傾向（2003年）

調査対象雑誌	泉質名記載	正しい泉質名表記 (%)
A旅行月刊誌（温泉特集記事掲載）	134	48（36）
B旅行月刊誌（温泉特集記事掲載）	40	15（38）
C温泉情報誌	141	71（50）
D温泉情報誌	57	32（56）
E温泉情報誌	205	88（43）
F温泉情報季刊誌1	41	6（15）
F温泉情報季刊誌2	29	7（24）
G別冊雑誌（温泉特集号）	117	113（97）
計	764	380（50）

（注）筆者の収集資料により作成。

誤った泉質名表記には、「－（ハイフン)」や「・(ナカグロ)」が正しく使われていないレベルのものから、独自の“泉質名”を創作して使用している例まで多様であった（表3)。

次に、同じ8冊の雑誌について、泉質名が新旧泉質名対照表に記されている新泉質名で記載されている割合（%)、旧泉質名で記載されている割合（%)、掲示用新泉質名で記

表３　誤った泉質名表記の主な例（2003 年）

泉質名表記に関する誤りの傾向	誤った泉質名表記の主な例
「—」や「・」を泉質名表記に正しく使用していない。	ナトリウム塩化物泉（雑誌F）
単純温泉を「単純泉」と表記する傾向がある。	単純泉（雑誌A, B, C, D, E, F）
アルカリ性という液性を泉質名として使用する。	アルカリ泉、アルカリ性泉（雑誌C, D）
温泉法上の温泉には該当するが、療養泉には該当しない温泉に　みられる、含有成分を反映させて作られた独自の“泉質名”。	フッ素泉（雑誌E） 弱食塩類ホウ酸泉（雑誌A）
浸透圧・液性・濃度・泉温について分類命名したもののみを表記している。	低張性アルカリ性低温泉など（雑誌C）
湯の特徴をつなげて作られた独自の“泉質名”。	無色透明弱酸性収斂性鹹味（雑誌C）
独自に作られた“泉質名”。	塩化土類ブローム弱食塩泉（雑誌E） 弱ナトリウム泉（雑誌C）

(注) 筆者の収集資料により作成。

載されている割合について調べた結果を示したのが表４である。

一つの泉質名を新泉質名と旧泉質名の両方で表記しているG雑誌を除くすべての雑誌が、一冊の同じ雑誌内の泉質名の表記に新泉質名および旧泉質名、掲示用泉質名の３種類を混在して使用していることが明らかになった。

新泉質名および旧泉質名、掲示用泉質名によって表記されている割合は、平均でそれぞれ46%、47%、5%であり、掲示用新泉質名による表記は、わずか5%と低いポイントである。そして、新泉質名と旧泉質名の表記については、同一雑誌の中で大差なく双方が混在して使用されており、むしろ若干ではあるが旧泉質名による表記の割合が多いという結果が得られた。

この結果により、1978（昭和53）年および1982（昭和57）年に鉱泉分析法指針の改訂が行われて以来20年以上の月日が経た今日でも、利用者にとって重要な温泉の情報源である雑誌などにおいて、旧泉質名が新泉質名と肩を並べて同等に使用されている実態が明らかになった。

(2) 観光パンフレットにみる泉質名表示

旅館やホテルなどの宿泊施設のパンフレットを300部、日帰り温泉施設のパンフレットを52部、観光協会などが発行するパンフ

表４　新泉質名・旧泉質名・掲示用新泉質名の表記数と割合（2003 年）

調査対象雑誌	新泉質名表記 (%)		旧泉質名表記 (%)		掲示用泉質名表記 (%)	
A旅行月刊誌（温泉特集記事掲載）	52	(39)	57	(43)	17	(12)
B旅行月刊誌（温泉特集記事掲載）	18	(45)	14	(35)	5	(13)
C温泉情報誌	50	(35)	78	(55)	3	(2)
D温泉情報誌	18	(32)	27	(47)	2	(4)
E温泉情報誌	76	(37)	112	(55)	5	(2)
F温泉情報季刊誌１	20	(49)	18	(44)	1	(2)
F温泉情報季刊誌２	16	(55)	8	(28)	2	(7)
G別冊雑誌（温泉特集号）	84*	(72)	78*	(67)	0	(0)
計	334	(46)	392	(47)	35	(5)

(注) 筆者の収集資料により作成。＊新旧両方で表記。「単純温泉」などのように、新泉質名と旧泉質名が同じ場合は「新泉質名」として扱った。

レットを64部、それぞれ全国の様々な温泉地から取り寄せた。

取り寄せた各パンフレット中に泉質名が記載されている割合（%）や、記載されている泉質名が新旧泉質名対照表に記された新旧どちらかの泉質名または掲示用泉質名および略記新泉質名を使って正しく表記されている割合(%)、新泉質名で表記されている割合(%)、旧泉質名で表記されている割合（%）について調べた（表5）。

旅館やホテルなどが発行するパンフレットに泉質名が記載されている割合は30%であり、さらに、新旧泉質名対照表に記された泉質名で正しく表記されている割合は全調査数のわずか10%に過ぎないことが明らかになった。日帰り温泉施設のパンフレットについては、泉質名が記載されている割合が65%であるが、正しく泉質名が表記されている割合は、29%弱となっている。また、観光協会などが発行するパンフレットについては、泉質名が正しく表記されている割合がわずか11%と低く、いずれのパンフレットからも温泉の重要な情報としての「正しい泉質名」を知ることは容易ではない。

表5　観光パンフレットにみる泉質名記載・正しい泉質名表記・新泉質名による表記・旧泉質名の表記数と割合（2003年）

調査対象パンフレット	調査数	泉質名記載 (%)	正しい表記 (%)	新泉質名表記 (%)	旧泉質名表記 (%)
旅館など	300	90 (30)	31 (10)	49 (16)	36 (12)
日帰り温泉施設	52	34 (65)	15 (29)	24 (46)	6 (12)
観光協会など	64	37 (58)	7 (11)	14 (22)	12 (19)
計	451	161 (36)	53 (12)	87 (19)	54 (12)

（注）筆者収集資料により作成。

各パンフレットに記載されている泉質名についても、旅行雑誌の結果と同様に新泉質名と旧泉質名が大差なく混在して使用されている傾向が認められた。ただし、パンフレットの場合は旅行雑誌の結果と異なり、わずかであるが新泉質名による表記が旧泉質名による表記を上回っている。

各パンフレットに記載されている「誤った泉質名」の傾向は、雑誌にみられる誤った泉質名の傾向とほぼ類似しているが、それに加えて「高度ラドン温泉」、「バイタルミネラル温泉」、「トロン温泉」といった天然温泉かどうか疑わしいような独自の“泉質名”が一層目立った。

また、旅館などのパンフレットに泉質名が記載されているかどうかということのみについてみると、都道府県単位においては格差を認めることはできなかったが、温泉地単位では、ある温泉地はすべての旅館などがパンフレットに泉質名を記載していないとか、ある温泉地は多くの旅館などがパンフレットに泉質名を記載しているといった漠然とした傾向を示唆するような結果を得ることができた。しかし、温泉地ごとの資料数が不十分であり、さらに詳しい研究が必要である。

4　まとめ

(1) 温泉利用者向け泉質名表記の現状

温泉利用者が温泉の情報源として拠り所にしていると思われる温泉情報雑誌や温泉旅館・日帰り温泉施設・観光協会などが発行しているパンフレットにおける泉質名の表記の現状として、以下のことが明らかになった。

①温泉情報雑誌には泉質名がほぼ記載されているが、新旧泉質名対照表に記されている泉質名を用いた正しい泉質名で表記されている

割合は少ない。旅館などや日帰り温泉施設、観光協会などのパンフレットにおいては、正しい泉質名で表記されている割合は極めて少ない。

②温泉情報雑誌もパンフレットも同様に、鉱泉分析法指針の改訂が行われて以来20年以上経った今日でも、旧泉質名が新泉質名と肩を並べて同等の割合で使用されており、この他に掲示用新泉質名も加えて、泉質名が混在して使用されている。

③温泉情報雑誌やパンフレットにおいて、新旧泉質名対照表に記されていない独自な“泉質名”が頻繁に使用されている。

①や③については、療養泉には「鉱泉分析法指針（改訂）」による「療養泉としての泉質名」が与えられることが、温泉分析に関わるような専門機関や専門家以外に普及していないことが、大きな原因ではないかと考えられる。

②については、イオン名を用いて表記される新泉質名より、温泉に含まれている塩などの物質名で表記される旧泉質名の方が温泉施設側の関係者や一般の利用者にとって温泉の泉質をイメージしやすく、なじみやすいものとなっているために、新泉質名の普及が進まず、両者が混在して使用されているのではないかと考えられる。

(2) 温泉利用者向け泉質名表記の課題

今回の研究によって、温泉利用者が泉質に関する情報を強く求めているにもかかわらず、「泉質名」という泉質を伝える“共通の言語”が正しく機能していない現状が浮き彫りになった。

こうした現状を踏まえて、温泉利用における泉質の重要性を再認識し、泉質を語る上での“共通の言語”としての「泉質名」を以下の観点から正しく普及させることが課題である。

①泉質名が鉱泉分析法指針によって決められていること、およびそれらには具体的な表記法が決められていることを広く知らせること。

②現在使用されている複数の泉質名による表記を改め、新泉質名の使用に限定させるなど、泉質名の混在をなくすような動きを起こすこと。

注・参考文献

1）布山裕一（2002）：「温泉旅行の実態と志向－第43回旅と温泉展アンケート調査結果概要(3)」温泉、第70巻9号、22～25頁。

2) 布山裕一（2000）：「温泉旅行の実態と志向－第41回旅と温泉展アンケート調査結果概要」温泉、第68巻8号、4～9頁。

3) 環境省自然環境局（2002）：『鉱泉分析法指針（改訂）』同局77頁。

4) 古田靖志（2003）：「温泉利用者向けの泉質表記に関する一考察」日本温泉地域学会第1回研究発表大会発表要旨集、17～18頁。

基調講演①

草津温泉の地域的特性と今後の方向

山村順次（千葉大学教授）

これまでの継続的なアンケート調査の結果、10年前と今日でも変わりなく、温泉客が温泉地を選定する際に重視する条件は、「自然環境」「温泉資源」「温泉情緒」の3つに集約される。草津温泉はその3点ともに特に優れており、温泉地番付でも昔と今も変わりなく、東の最高位にランクづけられる。温泉地の活性化にとって最も重要なことは、地域の個性を前面に打ち出すことである。草津温泉の地域的特性は、次のようにまとめられる。

1　自然性

草津温泉は群馬県西部。山岳地域の標高1,200mの高地に立地し、高原部一帯は上信越高原国立公園に指定されていて、自然景観に特に優れている。草津白根山の火口湖である湯釜は世界一の酸性湖（pH1.2）で、見事なエメラルドグリーンの湖水をたたえ、秋にはその斜面に点在するナナカマドの紅葉と一体化して観光資源性を高めている。殺生河原には、国指定天然記念物のアズマ石楠花の群落が広がり、高度を増すにつれてチシマザサとアオモリトドマツの亜高山帯樹林がコントラスをなし、志賀草津道路の車窓を彩ってくれる。さらに、本白根山麓には高山植物のコマクサが分布し、遊歩道も整備されている。

春には、温泉地域周辺のシラカバやカラマツの美しい芽吹きの後は、樹林中にレンゲツツジが咲き、カッコウの鳴き声で目覚めることもある。気候条件も優れており、夏は真夏日がなくて涼しく、夏季の湿度は70%台で、軽井沢が80%台であるのと比較しても避暑地として優位にたっている。冬季は積雪が深く、スキー場として好立地条件下にある。

このように、草津温泉はその周辺地域の四季折々の「自然環境」が観光客に高い評価を受けており、有力な温泉資源と一体化して、その価値を一層高めているのである。

2　温泉資源性

草津温泉を支えている源泉は100ケ所に及び、いずれも50～95℃の高温の自然湧出泉であり、豊富な湧出量は毎分3万6,800リットルにもなる。温泉集落の中央にある湯畑をはじめ、白旗・西の河原などの源泉に加えて、1974（昭和49）年に万代鉱源泉が開発されて給湯量が大幅に増え、200軒もの旅館や共同浴場で利用されている。この温泉はpH2の強酸性泉で古来療養泉として利用されてきた。特に明治期になって生まれた「時間湯」は、草津独特の温泉入浴法であり、草津湯治を盛んにした。硫化水素の臭いはいかにも天然温泉をほうふつとさせ、各所の無料の共同浴場は観光客の入浴の楽しみを増してくれる。豊富な温泉量を踏まえて作られた大露天風呂は人気が高く、大滝湯も「合わせ湯」などの伝統的入浴法を体験できる。湯畑での硫黄の採取風景は、ユニークな温泉集落景観として観光資源化している。

3　温泉情緒性

草津温泉の情緒ある景観は、湯畑とその周辺の和風建物群である。もっとも、一部には和風建築とは異質の建築があったり、ネオンがけばけばしい店舗もあるが、湯畑の空間を草津温泉のシンボルとして整備してきた努力の跡は伺える。湯畑から続く滝下通りは、伝統的な「せがい造り」の構造を持つ和風旅館街が整備されており、西の河原も地熱現象を間近かに観察できて、温泉情緒を感じさせて

くれる。

4　歴史性・文化性

草津温泉は温泉地発展の要件を十分に満たしていて、温泉客に高い評価を受けているが、その背景に長い歴史を今に伝えている伝統と文化があり、さらに新たな文化を創造していこうとする前向きの姿勢が強いことも指摘される。熱の湯で行われる湯もみショーは、「時間湯」の入り方を説明するものであり、近くの光泉寺には、病を治すために遠隔地からはるばるやってきて亡くなった人々の無縁仏の記念塔もある。西の河原の遊歩道沿いに、草津温泉開発の恩人でもあるベルツ博士の胸像もあるし、温泉資料館やベルツ記念館などの文化施設も充実してきた。そして、夏の温泉祭りに加えて、1980（昭和55）年に始まった草津夏期国際音楽アカデミーは、草津温泉をクラシックな温泉街と周辺高原部の温泉リゾート地域とを見事に機能分化させたのであり、今日の多様な温泉志向性にうまく対応しているのである。

5　草津温泉の今後の方向

①地域ガイドシステムの確立

以上のように、草津温泉はもはや新たな施設に投資することはなく、現在の観光資源や観光施設を最大限に活かすために、ソフト面の対策を検討することが重要である。まず第1には、地元のボランティアが温泉客とともに地域内を歩きながら、草津の歴史性・文化性・自然性を説明する無料のガイドシステムを確立することである。西の河原を散策しても、ベルツの像に立ち寄る人はほとんどなく、白旗の湯の共同浴場に入っても、多くの客は白旗の由来を知らない。草津温泉の先人達が草軽電鉄を開通させ、西武資本の進出に対しては町当局自らが観光開発を主導してきたこと、いち早くドイツの温泉地に学んで高原部のリゾート開発が進められた結果が、今日の草津温泉の著しい発展を導いたことなど、地域社会の主体的開発姿勢を観光客に伝えることに大きな意義が見出せよう。

②保養温泉地の確立

今後の草津温泉の方向はウェルネス（健康志向）の観点から、予防医学的な保養温泉地としての機能を重視することが大切である。老若男女にかかわらず、ストレス解消を温泉地に求めているので、適正な滞在費で数泊できる宿泊施設の整備が不可欠であるし、滞在期間中のメニューを設定することも必要である。すでに、「湯治の宿」としての関係旅館の取り組みもあるので、さらなる充実を望みたい。

③温泉地景観・環境の保全

温泉地を訪れてまず印象づけられることは、その町並みの環境保全の状況である。草津温泉の広場としての湯畑周辺は、以前に比べてかなり整備されてはきたが、さらなる景観保全・景観整備への取り組みが必要である。すでに10年も前に「草津町景観条例」が施行されているのもかかわらず、今日なお町並み景観の統一性のなさは、日本最高の温泉地としては評価を下げることにもなっている。湯畑周辺のクラシック草津の景観整備は緊急の課題であり、官民をあげての取り組みが望まれる。

基調講演②

草津温泉の地域振興策

中澤　敬（草津町長）

今日は、混迷する社会経済の中にあって、草津町は古き良き温泉情緒を大切に守り育てながら「温泉と高原、文化とスポーツの国際観光温泉リゾート草津」「日本一元気な観光温泉地草津」を目指し頑張っている「草津温泉の地域振興策」について、お話をさせて戴きます。

私が常日頃主張していることは、日本人に失われつつある日本の独特の文化が、温泉地にこそあるということです。本物であるというこだわりに関しては、草津温泉では自然湧出量は日本第一で、浴槽に使用する温泉はすべてかけ流しであり、頑固にこのことにこだわり守りつづけております。そして、草津町は「泉質主義」を大きく掲げてアピールしております。また、最近の様々なアンケート調査によると、幸いにも草津温泉は日本経済新聞社主催の「NIKKEI プラス１温泉大賞」での「行ってよかった温泉」の第１位にランクされました。この他にも、沢山の良い評価を各方面から戴いております。

草津温泉街の形態特色は、街の中心に湯畑広場があるということです。西洋にはよくあるのですが、人が集まりやすい大きな広場があるのです、そして、湯畑を中心にして円形に観光施設が広がって、円形の外側は全て国有林で囲まれております。ですから、四季を通して変化があり、非常に締麗でもあり一年中飽きません。次に、草津町は天与の恵みの温泉を大切に守っていこうという姿勢が、町民全員にあります。草津温泉にはボーリングをして撮った温泉は一本もありません。草津町ではボーリングによる温泉掘削は一切禁止しております。町民憲章に「歩み入る者にやすらぎを、去り行く人にしあわせを」とあります。なんと素晴らしい言葉でしょう。私はこの言葉が好きです。この言葉どおりの町にどう皆がしていったらいいのかが大切なことと思います。

①町民憲章理念実践五原則

それは、安全・清潔・親切・販売（誘客）・節約、この五つの観点から、今現状にある草津町の課題を認識し、町民全員と話し合い、これから歩むべき草津の方向をはっきりと明確にして行こうということです。安全＝誰もが安心して暮らし過ごせる町。清潔＝誰もが訪れたくなる美しい町。親切＝人の気持ちが通い合う町。販売（誘客）＝全町民の皆さんがセールスマンです。節約＝忘れ去られた節約の気持ちを復活させ無駄を省きましょう。この五つの項目に全町民の意見をあてはめ、整理をして今後の課題を明確化して、一つ一つの解決の方向へ導き進んで参りたいと思います。

②歩きたくなる観光地づくり

そこで、草津町は今大きな町づくり政策といたしまして、テーマに「歩きたくなる観光地づくり」をかかげ、町づくりに取り組んでおります。この調査の目的とする「歩きたくなる観光地づくり」とは何か、簡単に言い表せば「草津町における快適空間の創造」であります。どうしたら観光快適空間、暮らし振り空間の創造が出切るかを追求するものです。

③世界遺産にむけて

次に世界遺産についてですが、過日４月９日に世界遺産登録の際に現地を調査するユネスコの助言機関、ICOMOS（国際記念物遺跡会議、イコモス）の副委員長を務める西村幸夫・東大大学院教授を招いて、「湯畑の世

界遺産登録に向けて」と題して講演会を草津町で開催をいたしました。「世界遺産」という共有のテーマーを意識的に常に持って進んでいけば、「世界遺産登録」も夢ではないと思います。大事なのは、町民全員が共有の目標をいだいていくことであると思います。西村教授も「単なる集客のためでではなく、その地域の文化を守り、磨いていくような町づくりの積み重ねが大切であり、そのうえで、草津の文化の象徴である『湯畑』を中心とした温泉街全体を見直していくことで、いずれ『世界遺産登録』につながる」と熱く語られておりました。前段でも述べましたが、日本の文化は温泉地にこそあります。そこで、日本を代表する草津温泉といたしましては、温泉文化を守り、それをより未来に熟成円熟させながら、草津ならでのアイデンティティをしっかり持って、町づくりをしていこうと考えております。

④回遊性のある街づくり「ぐる～と草津」推進事業

これは、GPS 携帯情報端末機を使った散策ナビシステムです。目的は、観光客の回遊性の促進による地域商業の活性化と外国人受け入れ体制の整備であります。2004 年 1 月をめどに、観光客に英中韓 3 ヶ国語でリアルタイムに見所、観光情報の配信を始めるものです。散策する観光客に、宿泊の割引情報など観光客にとって役に立つサービス情報の配信、観光客が今いる位置周辺の観光スポットの情報、商店の特売情報などを提供し、増加する日帰り客の滞在時間を延ばす狙いと、外国語でも情報を配信して、外国人客の誘致に対応をしようとするものです。町役場と草津温泉観光協会が協力しておこなうもので、観光協会が運営をする「道の駅」においてGPS 携帯情報端末機を貸し出します。

⑤地域インターネットの完全構築

観光政策も大事ですが、住民の暮らし振りも大事ですので、住民サービスのための地域インターネットの整備もしなければならないと昨年より構想をねってまいりました。そこで、草津町は、ご家庭の電話・ファックス・携帯電話でもサービスの提供が出きるよう本年整備してまいります。これは、まさに住民の暮らしぶりの良さへの追求であります。

⑥合併問題と観光について

合併問題については、大きく分けて 3 つの問題があると考えます。(1) 任意合併協議会市町村の現状分析による現状の把握。(2) 合併後の国からの交付金に変わる財源委譲はどうするのかという自立政策。(3) 観光で食べていくのが一番であり広域観光ヴィジョンの将来構想の樹立。合併問題は今後の観光政策に重大な影響を与えますので慎重に取り組んで参ります。

⑦国策ビジット・ジャパン・キャンペーンについて

国土交通省は 14 年度事業で「ビジットジャパン・キャンペーン」を計画、草津町をその候補地に選んで戴くことができました。過日取材をおえて、台湾版「るるぶ」が完成し、すでに台湾で売られております。15 年度事業でも実施が決まっています。

⑧観光カリスマと国の観光振興政策

国は観光政策のひとつに「観光カリスマ官選」を選定すると打ち出しました。観光振興に取り組む各地のリーダーとなる「観光カリスマ」の第 2 弾として、16 人を発表いたしました。どういう訳だか解りませんけれど、群馬県から初めてということで私が選ばれました。これは、もう大変に光栄なことでありまして、観光カリスマの名に恥じないように、草津温泉を魅力ある場所にしていきたいと決意しております。最後に、日本情緒の文化は温泉文化・旅館文化にこそあると訴え、アイデンティティをしっかり持って大切にしながら、今は確かに明るい方向は見えない、だからこそみんで元気を出して頑張ろう、全国の温泉地が皆でがんばろうと叫んで、草津温泉の地域振興策にしっかりと取り組んで参ります。

シンポジウム

草津温泉における景観整備の現状と課題

コーディネーター：石川理夫（温泉評論家）
パネラー　　：首藤勝次（長湯温泉・大丸旅館社長）
〃　　：市原　実（長崎総合科学大学教授）
〃　　：山口昭夫（草津町民・自然公園指導員）

【石川】草津町民の皆さんも参加して開催する本シンポジウムのテーマは、発足した日本温泉地域学会に相応しいものと思います。草津を考えることは、日本の温泉と温泉地を考えることではないかという共通の思いで進めていきたいと思います。それでは、パネラーの方々から問題提起を願います。

◎温泉のある暮らしと環境に誇りを持つ姿

【首藤】長湯温泉の首藤です。私どもが現場で取り組んでいる話を交えながら、少し視野を広げて草津をどういう風に見たのかという点を含めてお話をさせていただきます。

長湯温泉は、よく御存じの由布院温泉から一山越えた湯平温泉から車で20分ぐらい、そして今有名な熊本県黒川温泉から1時間ぐらいという、由布院・長湯・黒川とトライアングルのように結べるところに位置した、久住高原麓の温泉地です。町の人口は2,850人。町村合併時には7,200人いましたから、すごい過疎化と高齢化と少子化に悩んでいる町ですが、「寒村の奇跡」と呼ばれるくらいに、この20年間で素晴らしく元気のある町に復活をしてきました。数字的に申し上げると、ここ5年間ぐらいで長湯温泉の交流人口が以前の大体倍以上の80万人近くになり、非常に活気づいた温泉地になりました。

どうしてそうなったのかということが恐らく、草津での町並み景観等の話につながっていくのではないかと思います。実は私は一昨年3月まで25年間、地元直入町役場に勤務して、商工観光・国際交流を含めて7つぐらいのセクションを一人で横断的に受け持ってきましたが、地域住民の方々と汗を流してやってきた成果が、お手元に配ったパンフレット資料にあるような形で表れてきたと嬉しく思っています。

そもそも、温泉地の成り立ちというものは、温泉のある暮らしと環境をそこに住んでいる人たちが十分に楽しんでいるという「暮らしぶり」を自ら誇りに思う姿に、外の人たちが「自分たちは朝からあんなに温泉に入れないのに、土地の人たちは入れていいなあ」と憧れを抱いて足を運んで下さる「個々のエネルギー」によって大きな元気をもらい、温泉地・観光地は伸びてきました。この原点を忘れてきたのではないかという気がします。

そこに立ち返ってみて、「自分たちに与えられているものは、こういう素晴らしいことだったのか！」と気がついた人たちは、自分たち独自の温泉文化なり歴史なり伝統なりを重んじて、個性の光る温泉地づくりを早くにやるようになったのではないかと思います。

私たちの直入町は、平成元年からドイツの温泉地と交流を重ねていますが、異文化に触れることでそういうことに気づかせてもらっています。そして、国際的視野に立った個性が光る温泉地づくりを目指すコンセプトが決まってから、急激にエネルギーを持って色々な施策を展開してきました。

草津に入って私がすぐ感じたのは、「湯畑」の素晴らしさはもちろんですが、周辺の森が非常に気持ちよく整備されている。草津町も

ドイツと交流していますが、これはまさにベルツ博士の偉業とその精神・哲学を受け継いで、その教えに従って自然環境を整備してきた点で大きな成果があったのではないでしょうか。加えて、最近では中澤町長を中心に優秀な行政マンの皆さん方が知恵を出し合って、今の時代に働きかけることのできるエネルギーを持っている点です。

◎歴史文化、風土に根ざしたものから景観が生まれる

【首藤】私は常々、「伝統とか歴史文化は、立ち止まってしまうとただの過去になってしまう」と言っています。素晴らしい伝統・文化を持っていようと、これに目を向けず気がつかずに進んでいると、ただの過去になってしまいます。ところが、「振り返れば未来」という私の好きな言葉がありますが、先人たちのやってきたことを振り返ってみて、その中に素晴らしい価値があることに気づき、今にどう活かしていくかを考えているところはグングン伸びています。そういう意味で草津温泉は、ベルツ博士が提案した湯治場・療養地としてのあり方を見失わず、また、自分たちが持っている感性でもって磨きをかけているところに、本当の素晴らしさがあるという気がします。

いま日本全国で温泉の湧出地は2万7,000を超え、1軒以上宿のあるところは3,500ヶ所ぐらいに迫っているのではないでしょうか。「ふるさと創生」以来15年間に大体倍以上の温泉の湧出地が現れましたが、私はそれを「温泉地」とは言いません。本当に時を味方にして歴史文化を積み重ねて魅力的な温泉地をつくってきた所は、街に入るとすぐわかるのは<気>の漂い方が違います。ところが新しく温泉が出来て、バッと温泉施設などを造った所を「温泉地」と呼んでいいのかというと、感覚的にこれはなかなか呼べませんね。それはなぜか。私は「温泉地」と「温泉湧出地」の違いは、<気>の漂い方の違いにあると思います。では、<気>の漂いとは一体何か。私はそれこそ温泉文化であり、歴史と伝統の力であると思うわけです。

私が個人的に好きな温泉地で、草津はもちろん、修善寺温泉あたりに行きますと、「ああ、いい温泉地だな」というのがわかります。これは経営という言葉だけに目を向けるのではなく、地域住民が自然環境の素晴らしさや温泉の持っている力、<温泉力>に非常に目覚めておられる。このあたりはやはり注目すべきではないでしょうか。

今日も草津で「湯もみ」をじかに見せていただき、まさに草津ならではの入浴法だと思うのと同時に、私たちが交流しているドイツ各都市やチェコなどを見ても、それぞれの温泉地がそれぞれの泉質に合った入浴法・伝統的な温泉文化を持っていることに気づきます。「自分たちが持っているものは何か」ということに気づいて、頑張ってこられているその一つが、草津では「時間湯」であり「湯もみ」ではないかと感じるのです。そのあたりを大事にしてきた草津は、さすがだという気がします。

そういうことが景観にも表れています。景観というのは、「こういう建物が建ったら景観が良くなります」といった薄っぺらなものではありません。背景には、そこに住んでいる人たちのものの考え方なり歴史文化、風土に根ざしたものが結集されてはじめて「景観」が生まれる。日本人はどうも「ここが悪いから、ここをこうしたら良くなりますよ」という発想で景観づくりをやることが多すぎるのではないか。そんなに簡単なものではないのです。背景には歴史文化が横たわっていることを忘れてはならないと思います。

個性のある温泉地、主義主張の見える町並みをつくる、建造物を生み出す、時を味方にできることが、町の風格を生んでいくのではないかと草津であらためて感じました。

【石川】ありがとうございました。関連して一つ、長湯温泉の共同湯「御前湯」を造り直

したときのコンセプトというあたりを少し話していただけますか。

【首藤】長湯温泉は炭酸泉で有名で、昭和初期に先人たちが「ドイツやチェコの温泉療養地のような温泉地をつくりたい」と夢見ていたわけです。ところが、戦争や資金不足の問題で夢は途絶えましたが、その中でも非常に頑張った先人たちがいて、平成元年に私たちがドイツの温泉地と交流を始めたとき、彼らがドイツの温泉療養地を目指していた昭和初期頃のパンフレットやリーフレット等が運良く出てきました。それを見ると、ドイツ建築の公衆浴場が町の中に建っているのですね。もう震える思いがしました。

先人たちは自分たちの持つ泉質の素晴らしさを知り、「ドイツに遜色のない泉質だから素晴らしい温泉地をつくりなさい」という研究者の指導に合わせてドイツ建築の公衆浴場を建てた歴史があるのです。それもあと一、二年遅ければ、先人たちの後継者であるおばあちゃんが亡くなっていれば、私たちに入ってこない情報でした。これは運命でした。そのおばあちゃんに呼ばれて、「先人たちがこのような事をやっていたことを覚えておきなさい」と。あのお金のない時代に先人たちが一所懸命頑張った夢の殿堂をもう一度復活させたいと、その物語性に感動して復活させたのが、バルコニーのある当時の姿で平成10年に完成した温泉療養館「御前湯」です。

もう一つ、この温泉館の中には、公共温泉施設などによくあるレストランや売店・土産品店等は一切ありません。なぜないか。行政の中にいた私は、「税金で建てる建物の中に地域が持っている機能、潜在能力とバッティングするようなものを建ててはいけない」ということで大喧嘩をしました。それ故に、立ち上がってもう5年になりますが、周りに農家のおばちゃんたちが出している「青空市場」の年間売り上げが8千万円なのです。そして、中では食堂の組合が注文に応じていて、その経済効果だけで2千万円になります。地域から可愛がられ、地域経済との接点を持つ公共施設ならではの妙味を、この温泉館は持っています。併せてドイツからも素晴らしい「宝物」がたくさん送り込まれています。

【石川】町並みをつくる、景観を整備するということは、ただお金をかければよいものではないという指摘がありました。とくに温泉地の場合、温泉地に住む人々と歴史が醸し出すものが、景観というものを突き動かすように形成していくのではないかという点に目をすえて、それらをとらえ返すような形で、お金も含めてかけていけば、町並みが効果的に＜締まっていく＞ということでした。次に、九州で江戸時代からの歴史を持つ長崎県小浜温泉に関わっておられる長崎総合科学大学の市原さんから問題提起をお願いします。

◎景観の統一的な整備が必要

【市原】長崎から船に乗ってやってきたと言いたいのですけれど、市原と申します。

九州にもたくさん温泉がありますが、その中で本当に成功している温泉は目立ちますが、大多数の温泉は、ある意味では停滞・低落していて悩んでいるわけです。有名な山の雲仙温泉と小浜温泉は同じ小浜町にあって、海の方の小浜温泉は難しい状態にあります。私が長崎に来まして、何度か商店街など地元の方々と「小浜温泉をもう一度活性化したい」ということで、中心市街地活性化基本計画をつくりましたが、大変苦労をしております。なかなか打つ手が実らないという中で、宿泊客数が昨年度30万人を切ってしまいました。今までの悪い数字を更新してしまったということです。理由はわかっていて、今の時代に従来型の温泉宿ではお客さんを引き入れないということです。

では、何を新しい切り札として挽回するかという方策が見えないわけです。そういう中で「とにかく出来ることからやってみよう」と、まさにお金をかけない、かけられない時代に、それぞれのホテル旅館や地域の持って

いる資源を活かして、それをどのようにしてお客さんにアピールするかということで、由布院・黒川・長湯といった立派な先例を学びながらやって行こうとするのですが、これがなかなか上手くいきません。

例を挙げますと、今集客にはホームページ開設という方法もありますが、残念ながら18軒ある温泉旅館でホームページを開設している所は、たった6軒しかないのです。あとは、旅行代理店からお客が送られてくるのを待っている状態で、私にとって見れば、未だにそんなことを続けていないで、なぜ自前のお客さんを持たないのか、と。

そのための一つの方法として、ホームページを開いて少しでも自分のところのお客さんを確保する、あるいは一度来ていただいたお客さんにどうやって喜んでもらえるかというところから始めようと言うのですが、なかなか進まない。商工会も頑張って講習会を開いても、人が集まってこない。女将さん方も「何かやりたい」と手話を勉強し始めました。長崎から車で1時間で来られる「長崎の奥座敷」として、どちらかと言えば団体客中心の温泉町でしたから。ところが、そうした団体客の数が本当に少なくなったのに、逆にグループ客を満足させるようなノウハウが確立していないのですね。

料理も相変わらずの定番料理です。何故もっと料理を工夫しないのかと言っても、「いや、料理長がなかなか言うことを聞いてくれない」とかでうまくいかない。今出来ていることの一つは、県が海際を護岸工事して埋め立てたのですが、そこは人工砂浜も何も無く、散歩する風情もありません。ここが草津温泉等とはまったく違ったところですが…、唯一防波堤が切れていて海水が入ってくる場所に「あかねの湯」というものをつくりました。

あと、企業から電動いすの寄贈を受けて、ショップモビリティーということで、「障害者の方も温泉旅館に入りきりではなく、町を散歩しよう」というサービスも打ち出していますが、各旅館希望者に2台ずつ割り当ててもまったく利用されない。このように打つ手が上手くいかず、壁にぶち当たっているのが実態です。そういう面から草津で色々勉強をしたいと参りましたが、私なりの荒っぽい見方をすれば、景観問題という点で草津ももっとやるべき点があるのではないかと率直に思います。

確かにお湯の部分だけ見れば良いのですが、周辺を見たときの景観のアンバランスさ、それから湯畑に次々と車が乗り入れています。雲仙温泉にもおばちゃんが温泉卵を売っている「地獄湯」という情緒のある景観がありますが、これでは別府鉄輪温泉の方がもっと良くて、「温泉情緒の切り札」とは言えません。もっと湯畑も整備する必要があるのではないかと思います。

それから色々な標識なども、黒川温泉では統一しているのは有名な話ですが、草津では個々バラバラな感じがします。看板・標識の統一は、まず一番に出来ることですし、もっと標識などにも配慮してよいのではないかと思います。

【石川】ありがとうございました。高原の草津温泉と比して、小浜温泉は海辺の温泉地の一つですが、立地条件が景観にあまり活かされていない点と、草津と同じく江戸時代からの豊かな温泉の歴史があることもやはり活かされていないという指摘がありました。

草津での景観は、標高1200mの高原という大きな自然環境、自然景観の中にあること、そして中心となる湯畑という「広場」を核とした町並みという、2つの要素が不可分だと思います。その意味で草津町民の立場で山口さんから問題提起をお願いします。

◎自動販売機がやたら並ぶと写真にならない

【山口】私は環境省の自然公園指導員というボランティア仕事を25年やっております。この仕事に子供たちにも参加をお願いしても

う25年経ちますから、当時参加してもらった中学1年生が30歳ぐらいになっています。自分が子供の頃に参加したことは、大人になって思い出しますので、「やってみようかな」という風になってくれると思いますから、あと1、2年でその人たちが中心となって参加するようになりますね。実は社会はこのように循環しています。私たちがいくら一所懸命景観保全や環境保護をやっても、子供たちがやらなかったら何にもなりません。私はいつもゴミ袋を携えてゴミを拾いながら歩くのですが、娘と山に行きますと、娘は何も言わなくてもゴミを拾います。だから、親あるいは大人が見本を示すことが自然環境を良くするのだと思います。

その中でコマクサ保護運動を行い、日本一のコマクサ畑が出来上がっています。最初は盗まれましたが、最近は盗る人はあまりいません。苗を提供してくださった方は、「盗られてもよいからやる」と言っています。普通盗られれば頭にきてやめてしまいますが、そうではありません。そこから始まり、今では色々な活動をしています。一つの例で、「森の巨人たち」（日本百名木）ということで営林署にお願いして、草津にはカツラの巨木が2本あるのですが、それを比定していただきました。

これも一例ですが、草津の自然保護で一番すごいのは官民一体という点です。「それは当たり前だ」と思っていらっしゃる方もいるかもしれませんが、実はそうではなくて、ほとんどの自然保護団体はお役所とケンカをしています。でも、ケンカしながらやると、何をやってもうまくいきません。例えば、都市計画では草津町が出している『景観利用の手引き』には「草津ランドスケープ」ということが書いてあり、私たちが意見を言えることが素晴らしいと思っています。

ちなみに、私は仕事場が軽井沢ですが、条例をつくって、町の中の看板を出すときにも細かい決まりがあり、一所懸命きれいな町にしています。私は写真をよく撮って本や雑誌に載せていますが、草津の町並みが汚かったり、ゴミが落ちていたり、あるいは自動販売機がやたら並んでいたりすると、写真になりません。いつも困っているのですね。例えば、町のシンボル「熱の湯」で、たまたま雪が降ってとてもきれいなので、「これは画になる」と喜んで写したら、建物のすぐ傍に6台並んだ自動販売機がまともに写ってしまった。そうすると、いくら周りがきれいでも、写真は使えないのです。役場に「どかしてほしい」と言ったら、「持ち主が誰だかわからない」と呑気なことを言っているのですね。残念ながら草津は素敵な町なのだけれども、そういう事があります。

私たちは町の中を綺麗にしようと一所懸命しています。そういう小さな活動でも町にお願いすれば良くなると思って、陳情書を出しています。先程「草津もイマイチだ」と言われましたが、僕らもそう思っています。ですから、皆が頑張って官民一体でやっていけば、少しは良くなるのではないかと思います。

【石川】ありがとうございます。写真を撮るとどうしてもカットをしなければならない景観のアングルが、やはり草津にも多い気がしました。景観整備の場合、ゾーニングとも言いますか、統一性と町並みの核である「湯畑」周辺への車の乗り入れの問題も出ました。観光客も車で多く入って来ますから、ゆったり安心して歩けません。自動販売機のことも出ましたが、会場から町役場の市川さんに、まちづくりの前提となるゾーニングの問題や現状について話していただきたいと思います。

◎歩きたくなる観光地づくりで活性化をめざす

【市川】昨年来から「歩きたくなる観光地づくり」（快適空間の創造）を進めています。その中に自動販売機の問題や歩行者天国、車の乗り入れも当然入ってくるわけですが、昨年JTBと協力して交通調査をしました。今

年、社会実験という形で、強制的に365日通行止めという乱暴なやり方ではなくて、全国レベルでいう基準値からすると、どうも一番混む時期に規制をかけたらどうか、と。そうすると本当に実現性があって、住む人にも「暮らしぶり」が良い。お客様にはちょっと我慢してもらえれば、と。そんなことを踏まえて、自動販売機から始まって交通形態と、今年は一つひとつの課題に取り組んでいきます。

町民からは色々意見が出されます。すべての意見を否定しません。すべて一回は受け入れます。そこから新しく理想とするものに向かって進めるべく、官民一体となって調整しながらやっているところです。

【石川】一言お聞きしたいのですが、草津は集中したエリアとその周辺の高原の広がりがあると思いますが、外部から来た観光客のための大きな駐車場等は現状では如何なのでしょうか。

【市川】駐車場問題についても、町では出来るだけ人に歩いてもらおうという施策です。草津は3方向から入れる状況ですが、既存の駐車場の拡張を含めて、徐々に整備をしている段階です。将来、あらゆる方向から来たお客様が草津の外側の駐車場に停めて、出来るだけ歩いていただく。そうすると商店街が活性化する。街が賑やかになる。理想としては3方向、2方向に駐車場を設けて、中をテーマパーク的な楽しい雰囲気のまちづくりにする。こう考えています。

【石川】ありがとうございます。今日は草津町民の皆さんも参加していますので、先程の町長のお話も含めて景観整備についてご意見をお願いしたいのですが。

◎草津の温泉をもっと健康づくりに活かしては

【会場A】私は「草津がいい」と思って引っ越してきた一人です。友人にも「こんなに良いところはないよ」ということで、その人も家を建てて草津に4日程前に移住してきました。看板や駐車の問題等色々ありますが、他に比べたらこんなに素晴らしい所はないと思って、永住の地として草津を選びました。私たちはそう思っているのですが、果たして住民のどのくらいの方が自分たちの町に誇りを持ち、それが日々の生活の中に取り入れられているのでしょうか。

例えば、草津は高齢者の医療費が高いのですが、温泉はただ入るだけではなくて、それを健康づくりのために活かそうという努力もあると思うのです。草津町として温泉を利用して、町民が温泉に誇りを持って、自分の長生きのためにどう活かすかということを真剣に考える人が増えて欲しいと思います。長湯温泉の方が仰っていましたように、地域おこしの話を聞くと、本当に誇りを持つ方がいる地域というのは、温泉地以外でも皆発展しているのですね。皆自分の町に誇りを持って、自分たちの手で何とかしようとする気持ちが強いところが、活性化されていると思うのです。そういう面で、草津を本物にするためにも、他の成功例などを伺いたいと思います。

【石川】観光客を含めて外から人が訪れるということは、地元の方がその町に誇り、自信を持っているということがないと、やはり人々は癒されないと思います。そういった事が基本になって始めてまちづくりが行われるのではないでしょうか。

温泉地草津の課題では、「療養」だけでなく、今提起があった「予防」という問題が大きくなっていると思います。人が心身共に癒されて健やかになるために温泉地草津を訪れるとき、どんな町並みで迎えるかということがあります。パネラーの方で先程のお話に付け加えたいという方がおられましたら、お願いします。

◎歴史の記憶をとどめる景観整備

【首藤】今、会場からご意見いただきましたが、

まさにその通りだと思います。地元の人たちが湯畑に対して「いい物を持っているだろう」というすごい誇りを持つ姿勢なくして、客集めのための湯畑だったら、そこで止まってしまいます。地元の人が自慢できないようなものが成長するはずがないし、時代を超えて語り継がれたり守られたりすることはまずないでしょう。自分たちの暮らしの空間の中にある湯畑だからこそ素晴らしいのです。

加えまして、湯畑の周りの石柵に「草津に歩みし百人」の碑ということで、与謝野晶子・田山花袋といった方々がいつ訪れたということが刻まれている。あれはすごく大事なことだと思います。そういうことを未来に残していく作業を行い、日常景観の中にそうしたものが見えている素晴らしさを絶対に忘れないで欲しいと思います。

これを町民の方、例えば子供たちが見たとき、「ああ、僕たちが生まれた町にはこんなにもすごい人たちが来たのだ」という自信を与えてくれます。刻名自体は安く出来上がるかもしれませんが、それが10年、20年語り継いでいくものは非常に大きいと思います。

私たちの長湯温泉の蔵から出てきた先人が残した昭和初期の1枚だけのパンフレットを見たら、「西洋ドイツ（現チェコ。編集注）のカルルスバート（現チェコのカルロヴィ・ヴァリ温泉。編集注）、東洋日本の長湯温泉」と書いているのです。それを見てシビレましてね。向こうのクラボビッチェ博士を長湯でのシンポジウムにお呼びしたときに、博士にチェコ語で書いてもらった長湯に対する感想の直筆を銅板に焼き付けて、町の大切な所に張っていきました。ドイツの駐日大使や国会議員など有名な方が長湯に来られた時は、必ず長湯に対するメッセージをいただいています。もしかしたら建物は100年もたないかもしれないが、銅板は緑青がふいても100年はもつかもしれない。そうすると、「よくぞこの山の中の小さな温泉地にこんな素晴らしい人たちが訪れて、素晴らしいメッセージをいただいた」ということが、町の子供たちにも大きな勇気を与えてくれる。

街角のちょっとしたところに、小さいけれどもそういったものを備える力、感性を持っておかねば、「大きな建物が建ったら邪魔だとか、いる、いらない」という景観の発想だけでは、底力のある町にならないのではないかと思います。

◎外の人間には新鮮に映る景観

【市原】私は小浜町で「そぞろ歩きができる町にしよう」と提案していますが、実際には地元の方々は「いやあ、小浜で歩く人なんていませんよ」と。今まで旅館に皆カンヅメにして、囲い込みをしていた意識があるものですから、客を外に出したくないわけです。でも実際歩いてみると、石畳ではないですが、階段になった所に湧き水が出ていたり、昔ながらの地蔵さんや古いお寺があったり、斉藤茂吉の記念碑をつくってあったり、ちょっとしたものがあるのです。地元の人は「えっ、そんなもの？」と思うかもしれませんが、外の人間だと地元の人がそう思うものが新鮮に映るのです。

そういう面では、とにかくそぞろ歩きができるようなまちづくりにして欲しい。いわゆる下駄のカランコロンする音です。城崎温泉がものすごく成功していますが、あの感覚を小浜町に持っていって、海際を歩ける町にしたい。そのためには色々な仕掛けが必要だと思います。

例えば、前小浜町長が紫色の綺麗な花が夏場に咲くジャガランタンというインドネシアの木を持ってきて植えたのです。これはいいと思いまして、旅館に泊まった人に1本ずつ「記念樹として植樹しませんか」と提案していますが、みなさんやらないのですね。

先程の看板も建物ももちろんですが、照明一つとっても、長崎県の島原という所がありますが、そこでは足元にボンボリ、行灯と言いますか、上から当てるのではなく床から

50cmのところを照らすという照明をしていて、これがまた風情があります。そういうことを含めて、色んな見方の景観があるのではないかという気がしています。

ついでに、5月1日の日経流通新聞に「携帯端末で観光案内」という記事が載っていました。携帯を使う人が増えた中で色々な情報が流れていくと、もっと歩きやすいし、また歩こうとする気になると私は思うのです。草津の町でもそういうことに対応できる設備・体制をつくって欲しいと思いました。

【石川】湯畑のほかに草津における景観整備の大きな要素の一つに、共同湯の存在があります。これと、先程出された全体的な景観の統一感の問題について、会場から黒川温泉や野沢温泉の方にご発言いただきたいのですが。

◎住民が守り育てる温泉資源と景観

【松崎】黒川温泉の松崎です。先程町に誇りを持っているかという指摘がありましたが、私が20数年前に黒川温泉に帰ってきたとき、「こんな嫌な町はない。いつ出て行こうか」といつも思っていました。周りに何もなくて閑散とした所でしたけれども、それでも一つか二つは光るものがあると考えました。毎日、毎日何かがある。いつも新鮮な目で感動を、ということがなければ、新しいものは見えてこないと思います。言われたように地元にドップリ浸かっていたら、良いものも悪いものもわかりません。こうして一つのことを地道に続けていたら、少しお客さんが来るようになったかなという風になりました。

【石川】ありがとうございます。少しどころか大変なお客さんが来ているようですけれども。草津に次いで、13ヶ所の共同湯を誇る野沢温泉からご発言をお願いします。

【河野】野沢温泉の河野です。先程首藤さんからもお話がありましたが、観光の「見せ場」だけではなくて、住民も景観に何か良い形で参加できればと思います。

野沢温泉には13の無料の共同浴場があるのですが、それと同時にもう一つ自慢できることが90℃で自然湧出をもう何百年もそのまま皆がありがたく享受している「麻釜（おがま）」という源泉があります。昔、麻が産地だったものですから、麻を茹でて皮をむくために入れて置いたのですね。今もたくさんの人が来て、山で採った山菜をそこで茹でているのです。ずっと昔から管理はすべて住民自身で行っています。掃除は毎日やっていますが、昔は近くに大きな木の看板がありまして、それに隣組の順番が書いてありました。その一つの隣組が3日おきに2回掃除をして、次に回していました。今でもそうして、本当に大事にしています。大事にしているし、高温で危険なので、きちんと自分たちのつくったルールを守って使ってきました。

このようにずっと続いてきた伝統を活かしているというのを改めてすごく大事なことであると思いましたし、湯畑などではお話を聞くと、何ヶ月かに一度、湯を乾かして硫黄を採ると聞いたのですが、そういうことを町の人がボランティアみたいにすればよいのではないでしょうか。

【石川】野沢でも草津でも、人が歩ける温泉まちづくりということにも、街に点在している無料の共同湯は貴重です。時間があと5分ほどありますので、会場からさらにご発言ありましたらよろしくお願いします。

【参加者B】私の実家は湯田中渋温泉になるのですが、渋温泉は下駄の音がする石畳の道をつくりました。共同浴場もすべて開放して、湯巡り手ぬぐいにハンコを押してという形できっちりやっております。それに地獄谷にはサルが入る温泉もあります。それでも、よくはわからないのですが、どうしてもそこに魂が入らない。要はそういうものを整えても何か一つ足りないものがある。地元の人たちが誇りを思わないのかということも言えるのですが、何か気持ち的にキチッとしたものが欲しいというのが現状です。その足りないもの

が何か、教えていただければと思います。

【長島】大学に勤めております長島と申します。草津へはいつも湯畑と西の河原に必ず行きまして、緑色の藻が元気かどうか観察をします。実はあれは化石植物と言ってよいくらいの大変珍しい藻で、何億年もあの形のまま生きていると思われます。世界ではアメリカのイエローストーン公園にもありますが、私が見た中では日本では草津が一番です。今研究者たちがDNAの研究を始めていますので、大変貴重なものなのです。非常に強い酸性の温泉は草津が誇れるものですが、その景観をなして生息するあの藻もぜひ皆さんの誇りに思っていただきたいと思います。

【石川】草津を世界遺産にするための大きな支援の材料を、天然の温泉資源自身が与えてくれているという指摘でした。

今日は景観整備の現状の交換と問題提起という形に終わって、これからの課題については町長のお話も含めて町民の皆さん自身が、そして日本温泉地域学会にとっても開かれたテーマだと考えています。第1回目ということで、時間も限られた形で次に残すことになってしまいました。パネラーの方々を含めまして改めて本日はありがとうございました。

（石川理夫記）

書　評

木暮金太夫編：『錦絵にみる日本の温泉』

国書刊行会　102頁　2003年7月
4,700円（本体）

2003年6月までの10年間の長きにわたり、日本温泉協会会長を勤められた木暮金太夫氏は、温泉医学者であるとともに伊香保温泉の老舗旅館の経営者でもあり、温泉に関する古美術・古書の収集家としても知られている。事実、自ら経営をしている伊香保バーデハウス・ベルツの湯に「日本温泉資料館」を併設しているほどである。その木暮氏が、所蔵している錦絵や古地図をまとめて系統的に編集し、世に問うたことは時機を得た出版として高く評価されよう。

最初の頁に掲載されている六十余州名所図会伊豆修善寺湯治場は、幕末の浮世絵師歌川広重が描いた色刷りの版画で、中央の川原にある独鈷の湯の露天風呂を取り巻いて茅葺の宿屋や民家が建ち並ぶ見事なものであり、一気に興味をそそられる。次いで豊国・周延など幕末から明治期にかけての画家が描いた錦絵は温泉宿での遊興の図であり、浴槽での光景や部屋で三味線を弾かせたり歌を詠んだりしている当時の浴客の様子が、手に取るように分かる。

本書の構成を見ると、錦絵や古地図を配した「温泉繁盛遊覧図」「温泉地八景絵図」「温泉案内版画と鳥瞰図」「温泉双六と番付」などに加えて、木暮氏と平木浮世絵美術館館長の佐藤光信氏の対談「温泉錦絵をよむ楽しみ」や木暮氏の「温泉番付について」の記事が掲載されていて参考となる。

「温泉繁盛遊覧図」には、１～２頁大の鮮明な錦絵が多数掲載されており、伊香保温泉での打たせ湯の光景、湯上りの女性のこまやかなしぐさや外国人の来訪など、当時の温泉風俗を知ることができる。特に、伊香保鉱泉浴客諸病全快祝宴の図は、大きな鯛を囲んで女性たちが病気回復を喜んでいる光景を描いており、また別の図では宴会をして楽しんでいる人々もおり、明治初期の温泉地が療養と遊興の機能を併せ持つようになったことを物語っている。そこで、「温泉地八景絵図」のように温泉場を取り巻く自然や名所を集めた絵図が生まれることになる。

評者にとって興味深いのは、30数ヶ所にのぼる全国の温泉地の古地図を集めた「温泉案内版画と鳥瞰図」である。外湯を囲んで宿屋が密集し、近くに温泉寺や温泉神社があるのも多くの版画に共通している。草津や有馬など大規模な温泉集落をなしている伝統的な温泉地もあれば、熊野本宮湯本温泉之図のように、本宮を大きく描いて数軒の温泉宿がどこにあるのか分かりにくい図もあり、温泉地の特性が良く示されているのである。ここに、当時の温泉地の地域構造を比較検討する資料として古地図の果たす役割は大きく、本書出版が評価される所以である。さらに、温泉地のランク付けである温泉番付は、江戸時代文化年間から明治末期までのものが掲載されており、その変化を追うことで温泉地の盛衰が明らかになる。

以上、本書は幕末から明治期にかけての著名な浮世絵師の錦絵を鑑賞できるにとどまらず、当時の温泉風俗・温泉文化を垣間見ることができ、多数の古地図は温泉地域研究に貴重な資料を提供しているのである。本書は、まさに日本温泉地域学会会員の必携の書ともいえ、広く推奨したい。

（山村順次）

温泉地情報①

東根温泉のデイサービス事業

吉野妙子（山形温泉協会）

山形県東根温泉協同組合がいま取り組んでいる「いきいきデイサービス事業」とは、家に閉じこもりがちな高齢者に対して、日常動作訓練・趣味活動・健康づくり活動・温泉入浴及び仲間との交流等の各種サービスの提供を通じ、日常生活に対する支援指導等を行い、要介護への進行を予防し、健康で生き生きとした老後生活を送られるようにすることを目的とした事業である。旅館は公的施設に代わって一定時間、自分たちが経営する旅館をさまざまな条件のもとに提供するというもので、すでに3年余りの歳月が経ったが、全国的にも注目されており、視察や問い合わせが絶えない。

東根温泉協同組合のもとに、「生きがい活動支援通所事業（デイサービス事業）」の協力要請が、市の社会福祉協議会から寄せられたのは、1998（平成10）年の秋頃のことであった。要請された東根温泉協同組合では、組合員と話し合った結果、「協力する」ことに一致し、受け入れるにあたっての具体的な説明会を数回行った。急速に進む高齢化社会については、新聞やメディアを通してある程度の認識があり、何よりも地域の方々の意識にずれがなかったこと、市民生活にボランティア活動が浸透していたことが、この事業達成への最大の武器であった。

ここに、その事業の内容を記述する。

〔旅館側の対応〕

①大広間（テーブル・座布団等も）・湯茶セット・テレビ・カラオケセットの貸し出し。

②温泉入浴の提供とマイクロバスでの利用者の送迎。

〔1日のスケジュール〕

社協の担当ヘルパー（1級）が、当日当番となる旅館へ出向き、マイクロバスに同乗して利用希望者を迎えに行く。旅館到着後は、人員確認・健康チェック・生活指導・温泉入浴・趣味活動等のカリキュラムにより行う。この間、旅館側は準備と片付けのみで、入浴の介添えやその他全てはヘルパーが行う。半日を旅館で顔なじみの方々と過ごし、明日に向かって元気に生きるこの人々の顔は、はじけるような笑顔で輝いている。

〔現在の状況〕

①旅館に対する市からの補助

・最低限の保障　1回　2万円（マイクロバス代等）

・700円×人数分

②当日の集金

・1人　1,000円（福祉協議会の職員ヘルパーが集金）市へ

（弁当代500円はこの中から支出、弁当は市が手配し、直接当番旅館へ配達）

③当番のサイクル

・現在15軒の旅館が対応（1回2軒）

・1月に2～3回当番

・平均20名前後

④現在までの利用状況

・延べ数約2万2,000人

⑤市側に対する請求

・月毎に、温泉協同組合がまとめて東根市社会福祉協議会へ請求。社協側は、翌月の末までに組合へ支払う（組合から各旅館へ）。

温泉地情報②

妙見温泉の活性化

布山裕一（日本温泉協会）

妙見温泉は鹿児島県北東部、霧島火山西南麓に位置する温泉地で、天降(あもう)川とその支流中津川との合流地点付近に温泉街が展開し、新川渓谷温泉郷の最下流部にあたる。牧園町と隼人町にまたがり、天降川の左岸が牧園町、右岸が隼人町である。1967（昭和42）年に「隼人・新川渓谷温泉郷」として国民保養温泉地に指定された。歴史的に見ると、1752（宝暦2）年に折橋左門に発見されたという折橋温泉に、明治初年に来場した薩摩郡の傷病兵が効能を喧伝して世に広まったらしい。中津川沿いには、和気清麻呂が幽閉された折に入浴した「和気湯」も残されている。妙見の名称は、1895（明治28）年に妙見神社の旧跡から湧出する温泉が発見されたことに因んでおり、現在は折橋温泉も和気湯も妙見温泉と一体となっている。宿泊施設数は自炊施設を含めて11軒、その客室数は226室で収容人員は696人である。

〔妙見温泉の特徴〕

①妙見温泉最大の特徴は、温泉そのものにある。各宿泊施設では、それぞれ自家源泉を持ち、ほぼ総てが自墳泉で、泉温は42℃以上の高温泉がほとんどである。40℃程の源泉が数本あるが、これは炭酸の含有量が多く、過熱せずに療養用として使用している。宿泊施設温泉の浴場では、すべて「かけ流し」であり、地域全体が温泉の適正な利用をしていることは評価される。

②次いで、宿泊施設の多様性が挙げられる。小規模ながら種々のタイプの宿泊施設があり、歴史的建造物のクラシックな宿、団体客対応の宿、温泉にこだわった和風高級宿、非日常を全面に出した宿、湯治専門の宿、長期滞在の宿など多種多様である。中には、完全予約制で北海道の味覚を堪能できる宿や、食事なしのビジネス客対応のユニークな宿もある。宿泊料金も1泊2,200円（自炊湯治）～5万円（2食付き）と幅広い。

〔活性化への取組み〕

①妙見温泉観光協会では、1990（平成2）年10月に「ねむの木通り景観条例」を施行した。自然景観を保全するために屋外広告物や案内表示板を禁止した。乱立していた野立て看板や広告物などが自主的に撤去され、観光協会内に「街なみ委員会」が設置されて、統一案内板設置や建造物の色彩統一も進めている。

②観光協会では、鹿児島県のモデル事業として「体験型の観光」に力を入れ始めている。地元漁協と連携した「鮎釣り体験」やホタルの飼育による「ホタル鑑賞体験」の提供を試みている。また、地鶏の卵を使った「プリン作り」など、ユニークな観光体験も実施されてきた。

③次いで、入湯手形事業の「湯路」（ゆーろ）が挙げられる。宿泊客に2枚のシールを貼った木製の湯路手形を600円で販売し、基本的に2ヶ所の施設での入場が出来るシステムである（1施設のみ2枚必要）。現在、7施設が参加している。割安感があり、宿泊客に好評である。

④国道沿いにミニ公園を整備し、飲泉所や足湯を設置した。飲泉所は人道橋や宿泊施設にも設置されていて、散策途中に飲泉をすることが出来る。

以上のような活性化について、行政と民間が一体となって事業を進めている。

最後に一つの提案であるが、小規模でも歴史を勘案した妙見らしい外湯が出来ないものであろうか。温泉客と地域住民とのコミュニケーションの場の創設という意味から、是非検討して戴きたい。

学会記事

日本温泉地域学会設立の経緯

まず、日本温泉地域学会設立の経緯を述べて、会員諸氏の理解を得ることにしたい。近年、社会の関心を引く温泉と温泉地域をめぐる問題が多発している。公的温泉施設での温泉浴を楽しみに訪れた老人がレジオネラ菌によって多数死亡する事件が起きたり、温泉資源の適正利用に関して消費者からのクレームが多くなり、さらには平成不況下での観光温泉地の経営不振など進んでいる。これらの温泉地の社会経済的諸問題を解決するとともに、今後の日本温泉地のあり方を考えるためにも、人文・社会・自然各分野からの研究を蓄積する必要があり、研究者や温泉業界関係者、行政の職員、一般市民などが一体となって研究する場が必要とされていた。

そこで、有志が集って協議をし、そのひとりである山村が下記のような3月1日付け「日本温泉地域学会」設立趣意書・学会概要をまとめ、知人の温泉関係者に配布し、学会への入会を要請した。その結果、多くの方々からの賛同を得、4月5日には東京で発起人会を開催、発起人は遠隔地からも参加されて数々の提案が出された。

そして、何よりも草津町町長をはじめ草津温泉関係者の積極的な協力をいただけることになり、5月11日の設立総会と翌日の第1回研究発表大会をホテルヴィレッジで開催することができたのである。また、多くの賛助会員が本学会の趣旨を良く理解されて入会してくれ、会の運営を側面からバックアップしている。ここに銘記して、会員一同とともに感謝の意を表したい。

多くの問題を抱えている日本の温泉地に対して、温泉という天与の貴重な資源を守りつつ、これを適正に利用して国民の温泉保養・健康保持に役立てることが急務であることを念頭において、本学会が社会に対して寄与できることがあれば、本学会を設立した意義があったといえよう。今後とも、学会員の温泉地域研究への前向きの取り組みを期待し、本学会の発展のためにご尽力をお願いしたい。

日本温泉地域学会設立発起人

2003（平成15）年5月11日現在

安達　清治（大阪明浄大）
飯出　敏夫（温友社）
井沢　頼子（熱海市起雲閣）
市川　捷次（草津旅館組合）
浦　　達雄（大阪明浄大）
甲斐　賢一（鉄輪温泉）
君島　俊克（千葉大院）
小林　裕和（ジェイ・テイ・ビー）
佐々木信行（香川大）
篠藤　明徳（別府大）
ジュリ・スヌートバ（別府大）
千寿　健夫（別府地獄組合）
高橋　鴿子（別府聴潮閣）
天野　清次（西山温泉）
飯山十四二（草津商工会）
石川　理夫（温泉評論家）
市原　　実（長崎総合科学大）
沖津　弘良（ベルツ記念館）
菊地　荘悦（東鳴子温泉）
河野　正人（野沢温泉）
小堀　貴亮（別府大）
佐々木寿男（宮城県庁）
下島　康史（長崎国際大）
小　胡日査（ソニー）
高橋　繁広（湯川温泉）
竹村　節子（現代旅行研究所）
飯島　裕一（信濃毎日新聞）
池永　正人（長崎国際大）
市川　栄一（草津町役場）
内田　由紀（旅行作家）
音成　克巳（阿蘇町医師）
岸川多恵子（別府市民）
小林　　浩（千葉県庁）
斉藤　博邦（鹿教湯温泉）
佐藤　和志（鶴の湯温泉）
首藤　勝次（長湯温泉）
関谷　　忠（別府大）
高橋　　享（川渡温泉）
只野　公康（妙見温泉）

田村　　康（四万温泉）　辻内和七郎（箱根温泉供給）　鶴田浩一郎（別府温泉）
寺田　　徹（日本温泉協会）　利根川治夫（早稲田大）　鳥海宗一郎（江戸川大）
中澤　　敬（草津町長）　中尾　　清（大阪明浄大）　中島　美江（熱海市民）
長島　秀行（東京理科大）　中村　恭久（三朝観光協会）　中村　昭和（伊東温泉）
中山　昭則（別府大）　布山　裕一（日本温泉協会）　野口　冬人（現代旅行研究所）
野本　晃史（岡山商科大）　濱田　眞之（地熱）　姫野　由香（大分大）
深澤　喜延（山梨県庁）　福田　信夫（草津町役場）　古田　靖志（岐阜県博物館）
松崎　郁洋（黒川温泉）　宮崎　範一（草津観光協会）　森　　繁哉（東北芸術工科大）
八岩まどか（温泉研究家）　山口　昭夫（草津温泉）　山田　美園（小谷温泉）
山村　順次（千葉大）　由佐　悠紀（京都大）　横山　秀夫（草津温泉）
吉野　妙子（山形県温泉協会）

以上７０名　50音順

（　　）内は所属・肩書きなど。○○温泉は、当該温泉地の温泉旅館経営者

記

温泉関係者各位　　平成15年3月1日

「日本温泉地域学会」設立趣意書

今、日本の温泉地が温泉資源と観光経営の両面から、大きな岐路に直面しています。日本は確かに世界に冠たる温泉国であり、その温泉資源や観光経済上のスケールは、世界の温泉地の比ではありません。しかしながら、これまでに天与の貴重な温泉を、果たして適正に利用してきたのか、温泉観光業経営上無理はなかったのか、入湯客に十二分の満足を与えてきたのか、温泉地の町並みは心から癒される空間であったのか、さらに今後の持続可能な温泉地のあり方について総合的な視点から議論がなされてきたのか等々、はなはだ疑問を禁じえません。

私は過去40年にわたって、日本の温泉地の発達や観光産業・入湯客の実態を調査研究し、より良い温泉地づくりの参考になればと思い、一般誌や各種の講演を通じて提言してきました。しかし、一般論としての温泉地のあり方は理解できても、各温泉地の地域的特性を活かした具体的活性策や何から手をつけたら良いのかまでは、浸透しませんでした。とはいえ、温泉地の理念を踏まえた地域リーダーの主導性のもとに、温泉地をあげて地域おこしを実践している温泉地では、不況の現在でも大きく発展していることは周知の事実です。

これまで、温泉関係の学会としては医学・地球科学・工学など自然科学の分野のものがありますが、温泉地の歴史・地理・文学・社会・経済・経営・計画・環境保全など、主に人文・社会経済現象を包括し、かつ社会に向かってその成果を提示して、より良い温泉地域社会の形成につなげようというものはありませんでした。

つい先日の2月14日（金）、午後7時30分からNHK総合テレビで関東甲信越地方向けに「特報首都圏　その温泉はホンモノですか～始まる温泉表示制度」が放映されましたが、浴槽での温泉の利用ひとつとっても、社会科学と自然科学の両面から解決すべき多くの課題が山積していることを痛感しました。

ここに、私は研究者のための研究発表の場としての学会ではなく、社会に貢献できる学会の必要性を感じ、研究者のほかにも温泉関

係の業者や行政・団体関係者、温泉地づくりに関心のある前向きの姿勢をもった一般市民などの参加を広く募り、自由な議論と情報交換ができる「日本温泉地域学会」を設立することにいたしました。すでに、知人である温泉研究者や温泉地活性化に尽力されている地域リーダー・温泉旅館業者、行政・団体関係者、一般市民などからご賛同とご支援の承諾をいただいています。別紙に、本研究会の概要を記しますので、多くの方々のご参加をお願い申し上げます。

千葉大学教育学部地理学研究室
同大学院自然科学研究科地理環境学研究室
教授　山村順次

「日本温泉地域学会」の概要

① 本会の名称は「日本温泉地域学会」とし、温泉地に関する人文・社会・自然等の各方面からの総合的な温泉地研究の場であるとともに、各温泉地の諸課題の解決に寄与できるような会とすることを目指します。英文名は「Regional Science Association of Spa, Japan」とします。

② 本会の事業は、まず温泉地での年2回（春・秋）の研究発表大会、その温泉地での視察会とシンポジウムを行います。不定期に温泉地で温泉講演会・セミナーや視察会を行い、財政状況が安定すれば会員による温泉地研究プロジェクトを実施し、温泉地域社会への貢献をします。また、要請があれば、会員専門家による委託研究も受けます。

年2回の研究誌「温泉地域研究」を発行し、会員の投稿による論文・研究ノート・書評などを掲載し、論文・研究ノートは審査を経ることにします。同時に、各温泉地のデータや課題、話題提供、会員相互の意見交換の欄を設けて、会員相互の交流を促します。

③ 役員は総会で選任し、会長のほか副会長2名以内、会務に専念する理事長、常務理事若干名、会務を遂行する理事20名以内、監事2名、幹事若干名をおきます。当面、任期は3年とし、再任を妨げないことにしますが、当然役員の交代による学会の活性化は必要になり、今後の課題とします。

④ 本会の会員は次の4種類とし、学歴・職業を問わず、温泉地研究に熱意を持つ方を会員とします。特に若い方々の参加のもとに、活力のある学会にしたいと思います。

一般会員：年会費　4,000円
学生会員：年会費　2,000円（大学院・学部学生）
賛助会員：1口3万円とし、1口以上とします。
名誉会員：本会が特に功績があると認めた会員など。年会費無料

⑤ 本会は、平成15年5月11日の設立総会をもって発足します。

⑥ 本会の設立総会と研究発表大会を平成15年5月11日（日）・12日（月）の両日にわたり、群馬県草津町において開催します。草津町では、全面的に大会受け入れの協力を約束してくれており、温泉資源・町並みや周辺の自然景観地の視察をします。江戸時代も現在も、日本最高の温泉地として評価される草津温泉の訪問を予定に入れていてください。

⑦ 事務局は当面、千葉大学教育学部地理学研究室内（山村研究室）におきます。

所在地：〒263－8522　千葉市稲毛区弥生町1－33
電話：043（290）2543・3963
FAXは2543と同じです。
E-mail：yamamura@faculty.chiba-u.jp

日本温泉地域学会設立総会・第1回研究発表大会スケジュールとプログラム

開催温泉地：群馬県草津町草津温泉
協　賛　　：群馬県草津町
開催日　　：平成15年5月11日（日）～12日（月）
会　場　　：草津温泉・ホテルヴィレッジ〔TEL：0279（88）3232〕
受付開始　：5月11日（日）　11：00～
参加費　　：一般会員2,000円、学生会員1,000円、草津町民外一般参加者2,000円

5月11日（日）　11：30～12：30　学会設立準備委員会
12：30～13：20　昼休み
13：20～14：00　学会設立総会
14:10～17:30　草津温泉視察会（白根山ロープウエー・湯釜・温泉資料館・湯畑・熱の湯湯もみ）
17：30～18：30　休憩
18：30～20：00　懇親会（ホテルヴィレッジ）

5月12日（月）　8：40～10：00　自由論題研究発表4件（1件発表時間20分）
10：00～10：20　休憩
10：20～12：00　自由論題研究発表5件
12：00～13：00　昼休み
13：00～13：30　基調講演①「草津温泉の地域的特性と今後の方向」
13：30～14：00　基調講演②「草津温泉の地域振興策」
14：00～14：20　休憩
14：20～15：50　シンポジウム「草津温泉における景観整備の現状と課題」

研究発表大会プログラム

5月12日（月）

〔自由論題〕　発表時間：20分（発表15分、質疑5分）

座長：浜田　眞之（地熱）

8：40～　9：00　利根川治夫（早稲田大）草津温泉の郷土史家・中沢晁三氏の業績
9：00～　9：20　大久保あかね（立教大）温泉地における日本旅館の成立過程
9：20～　9：40　中山　昭則（別府大）大正期における別府温泉の別荘分譲について
9：40～10：00　浦　　達雄（大阪明浄大）別府温泉郷における街づくりの動向
10：00～10：20　休憩

座長：布山　裕一（日本温泉協会）

10：20～10：40　中尾　　清（大阪明浄大）神戸市観光行政と有馬温泉の活性化
10：40～11：00　岩田　　智・宮井　久男・芝田耕太郎（岩手県立大）鶯宿温泉に関する統計的分析
11：00～11：20　小堀　貴亮（別府大）大分県湯平温泉における湯治客の実態
11：20～11：40　菊地　荘悦（東鳴子温泉まるみや）鳴子温泉郷の「温泉療養プラン」
11：40～12：00　古田　靖志（岐阜県博物館）温泉利用者向けの「泉質の表記」に関する一考察

12：00～13：00　　昼休み

〔基調講演〕

司会：長島　秀行（東京理科大）

13：00～13：30　山村　順次（千葉大学教授）草津温泉の地域的特性と今後の方向

13：30～14：00　中澤　　敬（草津町長）草津温泉の地域振興策

14：00～14：20　　休憩

〔シンポジウム〕

14：20～15：50　「草津温泉における景観整備の現状と課題」

コーディネーター：石川　理夫（温泉評論家）

パネラー　　：市原　　実（長崎総合科学大学教授）

〃　　：首藤　勝次（長湯温泉大丸旅館社長）

〃　　：山口　昭夫（草津町民・自然公園指導員）

日本温泉地域学会入会申込書

平成　　年　　月　　日

会員種別	一般　　学生　　賛助（　　）口
ふりがな 氏　　名	印（満　　歳）男・女
団体名・商号 代表者名	印
勤務・所属先名称	
所　在　地	〒
	電話　（　　） FAX　（　　） E-mail :
現　住　所	〒
	電話　（　　） FAX　（　　） E-mail :
研究・関心分野	
メールでの対応	可能　　不可能
研究会誌送付先	勤務・所属先　　現住所

＊学生会員は学生証の写しを同封してください。

事務局受付日：　　年　　月　　日

申込書送付先

〒263-8522　千葉市稲毛区弥生町１－３３

千葉大学教育学部地理学研究室内（山村研究室）

日本温泉地域学会事務局

電話・FAX：043(290)2543

E-mail：yamamura@faculty.chiba-u.jp

郵便振替：口座番号　00190－6－462149　加入者名：日本温泉地域学会

日本温泉地域学会役員

会　　長　山村　順次（千葉大学）
副 会 長　石川　理夫（温泉評論家）
理 事 長　浜田　眞之（地熱）
常務理事　長島　秀行（東京理科大学）
〃　　寺田　　徹（日本温泉協会）
理　　事　池永　正人（長崎国際大学）
〃　　市原　　実（長崎総合科学大学）
〃　　河野　正人（野沢温泉住吉屋）
〃　　辻内和七郎（箱根温泉供給）
〃　　布山　裕一（日本温泉協会）
〃　　松崎　郁洋（黒川温泉ふもと旅館）
〃　　八岩まどか（温泉評論家）
〃　　横山　秀夫（草津温泉郷土史家）
監　　事　音成　克巳（阿蘇町温泉医）
幹　　事　君島　俊克（千葉大学大学院生）
〃　　小林　　浩（千葉県庁）
〃　　中山　昭則（別府大学）
浦　　達雄（大阪明浄大学）
菊地　荘悦（東鳴子温泉まるみや）
首藤　勝次（長湯温泉大丸旅館）
中澤　　敬（草津町長）
古田　靖志（岐阜県博物館）
森　　繁哉（東北芸術工科大学）
由佐　悠紀（京都大学）
野本　晃史（岡山商科大学）
小林　裕和（ジェイ・ティー・ビー）
下島　康史（長崎国際大学）

任期：2003（平成15）年5月11日～2006（平成18）年春季総会

温泉地域研究　創刊号
2003年９月30日発行

編集・発行者　日本温泉地域学会

〒263-8522　千葉市稲毛区弥生町１-33
千葉大学教育学部地理学研究室内
電話　043（290）2543
FAX　043（290）2543
振替　00190-6-462149

印刷所　株式会社 こくぼ
〒260-0843
千葉市中央区末広３-３-10

ISSN 1348-7965

Journal of Studies on Spa Region

No.1
2003.9

contents

Preface to the Journal of Studies on Spa Region ..... Junji YAMAMURA

Article

Regional Changes and Promotion of Health Spas in Japan ..... Junji YAMAMURA (1)

Research Notes

Consideration of Historic Community Bath " SOYU " ..... Michio ISHIKAWA (11)

Villa Development of Beppu Spa during the Taisho Era ..... Akinori NAKAYAMA (17)

The New Trend of Activation for Tourism Development in Beppu Spa ..... Tatuo URA (23)

The Present Situation and Problems on the Expession of Characteristics of Thermal Waters for Visitors to Spa ..... Yasushi FURUTA (29)

Lectures

Regional Characteristics and Future Course of Kusatsu Spa ..... Junji YAMAMURA (35)

Policy of Regional Promotion in Kusatsu Spa ..... Takashi NAKAZAWA (37)

Symposium

Present Situation and Problems of Landscape Preparation in Kusatsu Spa ..... (39)

Book Review

Kindayu KOGURE ed. 『Japanese Spa with Color Woodblock Print』 ..... Junji YAMAMURA (48)

News on Spa

Day Service for persons of old age group in Higashine Spa, Yamagata Prefecture ..... Taeko YOSHINO (49)

Activation of Myoken Spa,Kagoshima Prefecture ..... Hirokazu NUNOYAMA (50)

Notes and News ..... (51)

Regional Science Association of Spa, Japan
c/o Department of Geography, Chiba University, Chiba 263-8522, Japan